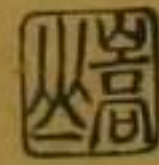




門 凡 3
3285
卷

東 路 濱 之 砂 子

嵩上房 祥



東路地傳 卷第一

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

江戸日本橋分所川口近二里

新八幡舎之宿所之事也俗に

宿と云ふ事下宿の字用

第遠橋見分日本橋と十三町

浅草見分十町

日本橋 長十四町三丁右之方 津城

在之方江戸橋後子と野右之向

裏と云見分

中橋 日本橋分所町橋八分一

京橋 十二町中橋分所町

新橋 京橋分所八町宝永 庚寅新子

見付と築れ芝口と云右未坂幸
橋也名ア人少は宅名と変名乃
比に及者流と家臣於龍氏の勸
也系なる宅名とを江にありて
勸言し支と後には子孫と又い
下は後と云く宅名は伴特冊
と軒遇突智と系生く伴特冊
火の林軒遇智と産経の崩れ
故に僅言兎と云云をかりて色中
火除の神と云くおのり合ふて八勝
軍地をたて武士の崇敬と故に世
と終ては才は能く思ひたり別
各福寺ハ新紀の云云園東此

四箇寺也

飯倉神の社 奈良皇代ハ

後天照宮(法)より毎歳租
税と有り故に毎歳に念庵と建
て穀收し之をくし武蔵守の租
税と集むるに之より屋の成なり
故に飯倉山と云

坊上寺 後小松院中草創西登

上人園基園東十八ヶ寺後林と熱

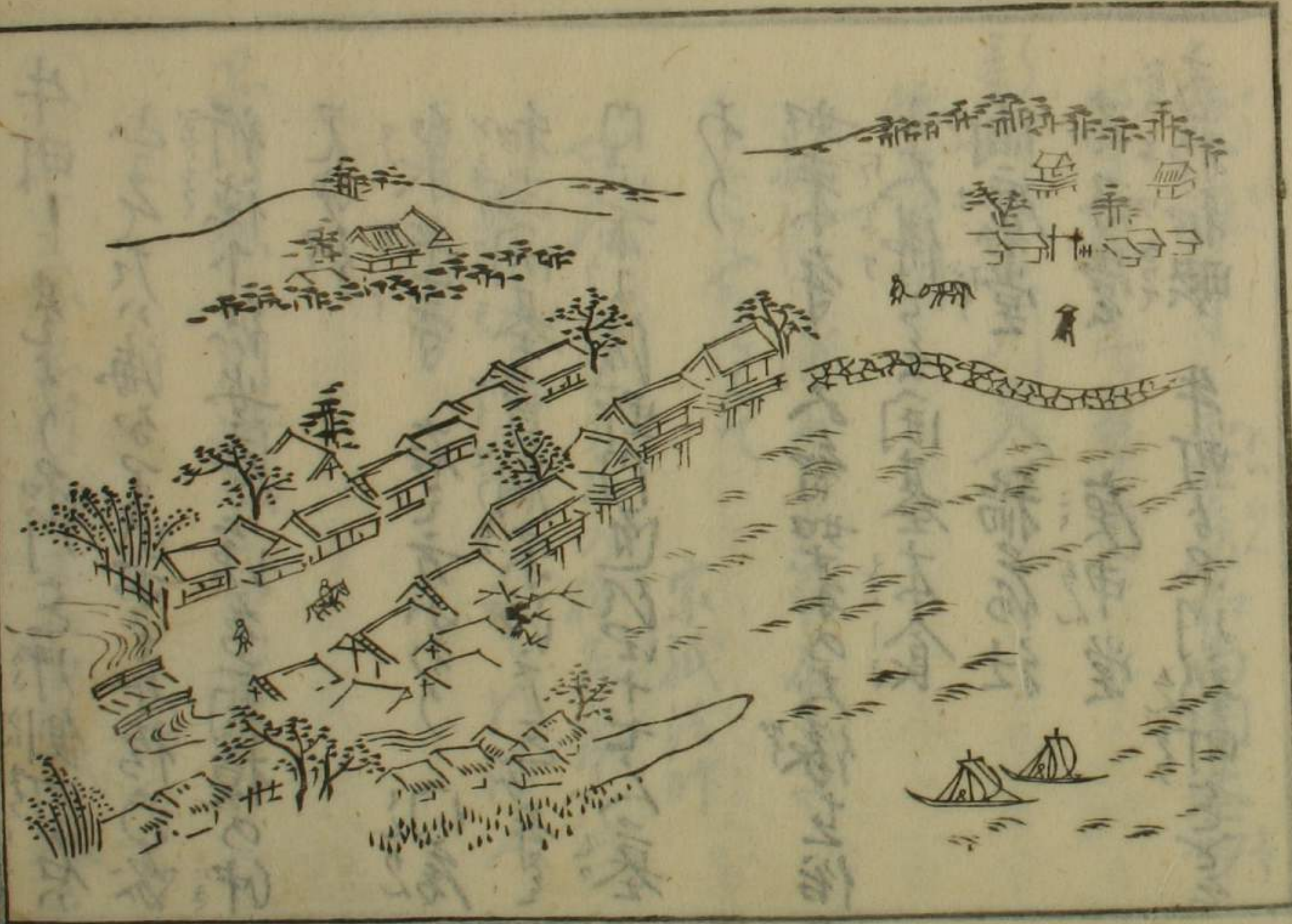
不寺

源助橋 乃新橋より江所或説

首八代川と橋本名をたの比ハ常

陸の橋川ハ不異と云橋川と名

志をかりてさきぞとて名を承けて今ハ
 さだまの知事の人をすといえり
 宇敷川橋 三日 源成橋 五日所
 今松橋 六日 宇敷川橋 六日所
 新波橋 七日 今松橋 八日所
 元札辻 右に在るハ新堀古志町ハ
 名也
 三田八橋 右にあり 正保年
 中勸徳神作ハ後色郷が守
 此のといえり
 札辻 庚寅歲新に石垣本戸
 と筑おかる芝橋より七町目ハ橋ハ
 四十町也



牛町 是より和川を所側町右
山をたか海を望む可き舟橋乃其
行徳下総安房濱を相模の沖
又ゆ記

白水寺 右の方あり 門庭

和尙円基曹洞宗江之口寺

内は和流野内通江口十七人墓

あり

如来寺 不智如来の大像を俗

に大佛と云円基本食

圓慶堂 稲荷社

太子堂 庚申堂

高形和照 牛町と和川新町とを

東禅寺 霊庵和尙円基妙

心守江之口寺之口

新町 和川の入口

稲荷祠

新波の浦ありと不本と云

宗紙法師

やぬらうと云の標名ありたり

船ふこりほむと云此浦人

和川江 川崎に二里半

○一里塚和川入口より右あり一里塚の

東海寺一
平わり是山下の急の所一里塚
なり一里塚と中華よてハ封塚と云
韋孝寛と云人初て築ク築ク
小史よア云んたり一里と云ハ別
わ中幸に商人一人と一歩と
云小商人ハ殷湯王の一人也曰ハ
用ゆる大工の曲入ある後と云造
少まかひ人云曰ハ出て八寸五分
と云る一六十方と一町と一六町
と一里とと中華の一里ハ今の二町
七十七方町小積り曰町才七方也曰ハ
一里ハ中華の八里乃才云古
曰十八町と云一里と一町東也

ハ八寸五分と一町と一六町と云一里と
云小積路ハ八寸町と一里と云
街乃ハ三十六町と云一里と云
孝右方坂下と云六町一里と云
正徳二壬辰歲の母貴目輕子の
教削弘 信書苗歌強江府中近
江津津之沢吟味と云定
東海寺 古方山中也
万松山と号と寛永十一年に建之
因基法房和尚寺中致系小七
泉水假山の眺至不斜
浄教山
妙玉寺 法花宗

東海寺一

弘明寺 観音堂あり
海安寺 紅葉ヶ谷あり

さみ津川 弘川の口溪川のおんか
まふ瀬沢のさづふ川あり故よ云

しま川 神の社
市仕至場

弘明寺 八幡最御正親西院大正年中小
院宮より依て勸法に宮より門下の

石わら動くと内は火は終る言
とまふよりて終の處とハる言

系屋

池上本門寺 大正方小の山に

年堂焼てアんえど日蓮宗の本

寺也

やまの村 しまの村

小橋あり

大森 系店

大森地蔵 福徳 芳布孫 左よ

天非社 和冲教賣家あり

かまた 小うまご南うまごらふあり

橋わら南うまご新宿と云

ふらふら 斤町

古川葉作の屋右あり

八橋塚 八橋祠

小系屋あり

六郷

昔は西よ島に主忠住りつと云ふ
積久より鎌倉へ頼朝の御旗本
なりたる方と稱た村とて源忠
の住する里あり

六郷川

比川多摩川と云ふ多摩川武蔵
西の郡の名なりたる橋あり長石
九方街なる橋ありと云ふ其大を
る六郷右田矢判橋多と云ひけ
頼朝近年洪水より及く橋流る
火より今八年後より比川の右
池より流るなり比川より地を敷

樋と云ふ水たを色一平ノ家の
用水より系橋より南ハ多摩川の
水と目夕の用水と云ひ川と云
口流と云ふ是新田義貞竹法氏
小敷より流る下也義貞の妻
高と云ふ竹法義貞の妻人悲し
て義貞と云ふ新田大の
神と号し祠と建今より百年余
社程敷然たり可系集

たま川よきすす子はくりま
ゆきけ子乃くた悲と云ふ
と云ふ比川より定家の家
の跡あり

川崎弘 神奈川の二里半

弘のりりし多た方二里経行

大伴河系と云弘法大伴天竺一

後自像を造り流河川一流

少部よ浦を漂着と云深志

機拳りくふと云大伴河系と云ふ

本像よ牡蠣をく河系

た方方んをく河系

八咫 両方松の並木

めりし橋と云有り橋二ツ

市場 系店あり町番口も

箱根の寧子と云ふ河系

た方方寺小定作取書わら

赤橋見 入口橋長廿六石

見橋と云 系店

系麻年幾里 系店

子安記書く右よわら

○ 小夜須 入り口十二天の赤

舟船光澤書と深志の佐村之

は沖をくく沖を後船風波

此難産とわら

新宿 いせ川 系店

いせ川橋

織田村 右新宿分是と一は

かり 右方とのと浦橋

堀と下の寺小守が取書と

神奈川 程ヶ谷に一里九町

宿んづきうい法と海原との

徳野権現社 石の方あり

○ 弘く門大本の産乃トおわを

弘く門お格あまつまをとうてい

上とりふぶととととととと

清水の右と山根と鑿水と

小清水おら火清水と

からい法

夫はくか、以とととととと

氏方の傍小洞元二つあり

家上の様もあら人定へを

今も富士の人定へ建仁二年二月

程家命を仁田回希忠常と入

てつんを忠常人定へ入り地獄と

えんがう法同権現も名を

くん徳と終ると

進合 茶店大山への乃也

街乃あ方への波路と乃候よ進方

とふ

帷子 式八斤平と書先年以前

弘くををが程ヶ谷と相違ふ

合とく程ヶ谷一弘くとお

たと方の経路八徳金之乃

人徳金の方とんやう

相胡郷の武功と始一

足利の末武運と云後、事と終
 近代小田原征伐と云、豊臣秀吉と
 公孫、奥列と云、ついで、海路、經、會、を
 財、也、は、子、鶴、を、の、白、幡、宮、の、新、朝
 郷、の、本、像、と、見、て、激、少、を、所、由、と、云
 天下と切平け、四海と、中、子、推、る、は
 沖、舟、と、我、と、あ、る、を、左、に、か、り、れ、舟、の、每
 田、滿、中、の、浪、風、と、さ、り、船、を、我、が
 東、玉、の、友、友、と、云、右、深、深、と、流、入
 小、舟、と、我、と、あ、る、を、左、に、か、り、れ、舟、の、每
 少、は、我、兵、と、奉、り、と、國、東、境、舟、を、
 一、統、と、云、し、と、我、と、奉、り、早、賊、氏、と、
 なく、系、も、と、か、り、然、と、と、天下、と、云、

の、門、子、弄、も、我、切、の、沖、舟、より、優、ま、り
 の、か、つ、く、免、角、沖、舟、の、我、と、天下、友、也
 かつ、と、云、る、本、像、の、持、り、と、云、は、終、不
 人、皆、雄、膽、と、當、り、と、云、や
 岩、間、 新、町、の、入、口、也

か、う、と、一、續、皆、新、町、の、小、石、也

○ か、た、ひ、の、右、端、本、板、を、一、里、塚、
 一、里、塚、と、板、と、柱、と、八、段、と、何、え、たり
 首、付、一、里、塚、と、築、く、内、を、仍、一、下、吏、を
 里、塚、の、と、小、八、松、と、柱、を、と、と、云、い、け
 是、と、云、る、の、を、云、く、と、松、の、木、樹、も、ま、い、
 是、と、一、余、の、樹、と、柱、と、と、一、念、り、と、
 下、吏、板、と、と、保、け、板、と、柱、と、と、云、

祖ヶ谷坂 戸塚二里九所 式八二里

弘く入口弘中小橋あり

弘く中全弘くあり

新町 是も坂路谷限より

不ど加や 一番坂 権を坂と云

二番坂

長谷村 系店 坊本と云右より

本と建てて武蔵と相換玉の境増

と表と 右より全傳堂

矢宿坂 坂より餅と賣店あり故に

俗ハ焼餅坂と云

矢宿 坂中又中村と云

坂と云ふあり

科野坂 右より八松山たふ小乙坂の

より小系店わら村あり

たわら尾宿軍守たふ親善堂

たわら弘明寺親善堂と云

赤岩橋 小橋也

けごや たごやと云り

右わらわきむ村八幡と云

かわらと村 大心あり

又代橋 小橋也

右田 店舎あり戸塚より高と

町の中小小橋あり是をたわら田此

中小強念あり乃路ありつる鶴巻と云二里

長谷の親善堂と云二里半

矢部町 小橋ニツカリ戸塚の戸也

戸塚頭 友次ハ二里

禮年山崎嘉兵衛生ハ頭ニ宿トテ
の老將シテ曰首豪氏堂をさし
人を貸し殺すと夫妻わりハ賊り
殺さしぬ其毒の灵忌と出テ屋
々々之客又宿テ其泣とそ人乃武
人忍小對多々情状と同小冠実
以テ善言是ハ依テ事致人ハ彼
賊十人といハ小者木と是ハ此地を
十塚云々

○ 入口の町小わり戸塚の産と云

小橋ニツカリ

八橋町 右ノ方ハ八橋の社ナリ松
の沖小將宗乃寺ナリ

大坂 白土坂 茶店

○ 東宿町茶店あり町とつれ
後金山玉繩ニ城人ゆき是ハ
玉繩ハ昔時右九弟盛長住居セ
一地方

観音堂

大塚村 茶店あり

右ニふかやめ茶店

左ニ後金玉繩ニ

加はさる 小茶茶店 古昔ハ

小池わにま池は大地に於て諸宮乃新
と香火の居ありとぞ

加乃沃 瓦場坂 友法入口

たは孫宿大明神社

友法沃 平塚 三里半 或ハ三里半

○ 瓦場坂に下小わに

沃に門小徳念(飯路わにま三里
に於て一里九町

沃中橋あり 十六町

友法沃 清浄光寺 沃に入口に七町

六時念佛宗の因基を地時宗の慈
お寺也高僧の法王と廻る遊行と

と云 沃に八代寺小徳と小栗

親十人(慶永の石塔あり)小栗は

横山二門(石塔あり)小栗は出雲の

士也高田小栗(横山系)塔あり

て横山と隙あり 遂に毒酒小栗を

そは後後後生と其始末甚長

佐の口号小わに小栗八平良文の子

孫實高小徳と者八流あり是を

坂東の八平氏と云そ一流を孝隆

の大塚と号そ大塚の族は小栗氏

わに小栗人なり横山八代系玉七

堂に内也佐相摸の人と云八代

車田 たは江ノ保

引地 茶店ありおほ坂あり引地
小橋あり引地あり小栗と洗たる水
と云お口の坂と云小栗と車よ来た
り茶店あり車坂と云車小栗門あり
きたり登り引地と云

かごり とうりびくた云

川口屋 おほ一里塚あり茶店
あり町端あり方大山へり道小石
不動あり方江流えんゆ
江ノ橋を神字賀懸稲也今八弁
女天女と安室と云八後木の事六
葉橋ありと云の流やうりて橋は
わたる神はちうひのうらと云るべし

小わた なたとち 茶店

知我誇 是方大山能いゆ

十万坂 十万坂と云ハ倍終あり十
系坂あり一里塚の少一系あり
小坂也ハ不右之方富士山大山候
玉の山たは後念六浦江ノ橋と云
云うを流あり八系小坂と云十系わ
りゆ乃石也 此ハ昔後念六天候
一松本流少年と云たてりあり
建武の初是利吉氏云け坂中ハ小
時が兵と破り進んで後念八系
是よりそ氏はの園玉の武将と
自らと稱せり



○ 高砂の中小倉

右 八王子社

南郷 茶店入京小松あり町屋

小松あり

高砂村町屋入口八橋宮

今宿 中津町 町屋

相模川 今八馬入川と云甲斐國

孫松の下流舟渡り建久の末

孫松重成が妻小條時政の娘頼

朝卿の妻と姉妹なり没年久遠

福の乃小重成は川小松とかけぬ

松の供養の日頼朝卿強会より

来りん松の故話よけ河色水て安徳

帝乃其子名曰唐馬名曰...
 病と如て薨たぬと後重成と又
 故方々傳せしれぬ時の人び川の橋
 八不祥ありとて橋毀ぬ又と後
 實の如く再興つてと企りると云
 善信凶例とて誅て橋の事止ぬ
 元弘の乱は小條高時滅亡を子
 時邦總念と逃かりくと五大院
 宗般系は欺りて其自の兵を
 捕らきて殺さんといひ川の事ゆ
 此更なり

○馬入村 西へつぎは十日の町
 右之方白旗村と云ふ神祠并古塚

わり源義経奥列言鎖して自害
 志ぬ義経并其の自總念一送
 よ二の首は木の房といふ飛来り大
 衆の背の上不意に斬りておけり
 いふいふより總念中尸即祠と建
 白旗大明神と崇む今八金子
 宮と云ふ前の古塚ハ赤芝と云ふ
 葬らる塚あり并芝が事其の
 是号いちぢり一弁を又ハ智仁勇乃
 三徳と云ふ中胡人長中のにん
 山崎子の傳せしれハ実初を
 云々云々なり

八幡町 弟石町と云ふは

八橋の宮あり鶴峰山とて別為を
等覺庵とていふ名に居り内は大小一
行路あり

右に明神 権現祠

平塚弘 大儀に貳拾七町

おまふ 花水川 花水橋長四十五

う麗村 山より往古より繁入江也

善福寺 たりあり

高業寺

右に方持氏の社あり門は山

徳越ヶ原 右に方持小いゆに歴代乃

孫多し流集ふ我少之略

○化粧坂 平塚の寺堂あり名の

存と右に長志屋敷の跡と有

徳念堂あり一対は弘の長志の家

小松廿五丁の法少平松殿と有

我依成が思ひ人虎ハそをせり紙の

名とい通や也長志屋敷小虎が金

こころ有磯の石よりたき方泉水

の跡とて虎が度小虎の像あり

い下宿河原 今ハをいさ一遙よこ

ゆいさき谷細砂堆一のこころ

さきさき不名氏方の小史抄ひ落知

計なく孫宿不孫と信ふい地わ

りかりけ八日の影不照くねく指の譜

かき風吹付ハ砂飛んで目々々擔
夫歩古の行政維の地なり

大磯弘 小田原 四里

弘入口小橋あり

時立派 左方小寺あり 近代

難譜師三千風堂と建く文学

上人鈍作の西行の本像と安置

三千風自の石塔と建く

中興東性居士三千風師也

時立一派名の三層を吹うんん

一うらふふ乃といかおせん

田まゝかおと何よふこも

時立派の車道高い多の送葬

場少く卒於婆と建く所不死本を

と云ふたつを起立のくおらる

といふ皆矣説は傳へしは和のり

法師の説ふるを石を清東に才

三乃石亦ふかりぬるはいふと自

負せしむる井蛙柳ふ千載の比ふ

もの東玉小わをるが勅撰わくと

中て上洛をるる乃あり登蓮小行

をりり勅撰の受身得は生かあ板

痛くしゆ分しぬ入たりとよる行

時立派のや入たりと言はるる久

ざりりやと云ふ板はうんで周か

さてまた又東へ返りて返りて下りたり
とあり面行ハ多行院の北面の土作
友憲法也陰奥有若系亦衛乃一
族也其家の後南朝の大仏殿再真
勸化乃たれ小法益昇源とわと合と
秀滿は傳へて東へ勸化のたれ小
奥列（ト）夜々（ト）越三（ト）りり（ト）西行ハ
分たれわわハ頼同と返るく大
小切あり人小ハ物希有の風流
雲風明月小比（ト）べ（ト）人なり
慈福寺 小寺ハ虎ガ石あり丸
石也虎乃遠（ト）てと虎ガ石と云々
好乃遠也（ト）分（ト）と（ト）弟又（ト）又（ト）わ（ト）ん（ト）

小切 小寺ハ虎ガ石あり丸
石也虎乃遠てと虎ガ石と云々

好乃遠也分と弟又又わん
雲風明月小比べ人なり
慈福寺 小寺ハ虎ガ石あり丸
石也虎乃遠てと虎ガ石と云々

切通 山と切通く語ととれと傳て

切通と云い小寺ハ石像の地
わノ妖（ト）を（ト）か（ト）して（ト）誰（ト）来（ト）乃（ト）人（ト）と（ト）を（ト）ま（ト）す
仙也乃町小やたがうかんとを
ろと武吏の切りたると切痕乃痕
あり小切の信仏教と深く信じ
少六乃結化の漢とれ地産と重
小庭とと自是以西のあり

○わいさう 橋名玉房の門也

玉房 吾本より相摸の玉房也

右は橋と橋の二場あり西へつれ

小六の神に仕わり

甲まら 原 玉房の中小右也

玉房新宿 町外小右王堂あり

蓮散守

塩海橋 十回

ここの宮わり相摸の二宮あり

東梅法 入口小坂わり橋名長カ十

二宮 入口より小坂まき寺者

梅法より高瀬あり東町より三

の中吾妻明林の仕わり日武

この御妃橋名と云ふより橋名の是

日本記小わり

等覚院 七ヶ

○梅法 茶店おひ橋あり

押切 入口橋あり長カ九尺七寸方

甲村の山子 小橋

まら屋 七ヶ方小瀬あり

前川 橋長カ七尺 七ヶ方塩漬

徳念右大臣の御小漢名をからま

乃川瀬とゆればやとらふの言ふ

少許の詞書ふ二ヶ方下下向

漢名の宿乃前小前川といふ川

わりの御塔々多増り云々を日言

流りゆく河津の源をたどりて川を

本分りてまはる橋をたどりて

玉府津

左京親徳家の寺あり

親徳上人の自筆の石塔あり町

の橋長廿九石是をたぐり方十町

の村は我の村にわらへ中村と云ふ

一町也我の村はわらへ村の西町

圓本の最系寺と云曹洞宗の

僧徒極多小住の寺あり亦

なと云小田原の二里半小田原

見ゆ家たぐり方十町極多

○松系小わり

小八橋 松の中八橋の社有是なり

並子の松の中海原と云

さか里村 桑店 入京強盛松を

松二なりり着はは村を分り松の

と流の河はは小旅殿と云元暦の

礼は源系経八橋あり平宗也父子

と捕へては下と具をたぐりけり

と御堂日蓮念入人とも云松羽

字と云方あり系経の跡横らるる

と云く云系経と云欲せず小系村

政と使おきて後とあり云系経

父と云信長源念入日蓮也

也又又附政と云く宗也父子と

送りて云系経と云返りぬ系経

日蓮の男腰紙小わを後紙は
川の邊を水邊念(題)語也後紙
の浦福寺ハ後紙邊志て中伏紙
茶橋わり弁茶の筆云存中
池を硯の池と云中伏と書一附
は沈乃水と記あふ用たる在の石
かり

鞠子川 酒白川の東乃小川也と云
酒白川流れて鞠子川混ぶて一流
と云今ハ鞠子の名と知人小
る海乃記小足柄と記て小餘
後紙鞠子川と云るとわを酒白川の

事也於初ハ馬おて酒白と後ら
り付根系系時依(名)たりり
系時より波小戯れて流揚の水と
物物ハ小たりりもて系時懼と云
わえとまるも子川ハもて浪お
がもりりもとりもて物物ハ
まを流不流河乃九子川と云流
酒白川 志流りを年水と云
是を名銀の地をハ古橋のまり
定法武の林石怪小相摸玉餘後
郡川白神社わり酒白の事と云
ハ是より竹の中ハもて中と云今ハ
其(内)て木小田系一題と云り



新田社 古より

一又村 町分橋長十式十乃

山王 古より

星月夜社 堀川院を多百有
 又常陸が方 紙ひそり 温泉とと
 越少りし星月夜を 嬉しかり
 乃れと 御り 不之を 命を 守
 星月夜 井ハ 温泉 小わり

いゆらごの磯 海原と云古人の海原

多一ををこのハとと 思やこら

其のハとと 乃れ 破れ 玉を 人をも

つおは 日ハ いゆらごの 磯や かく 今

八根等とハ右邊也
能緩ハ当玉の郡の所是今俗ニ洵
級ニ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ云ハ小
餘後の素ハ又ハ云云云云云云云云
人紀行ハ是柄の次小儀の前小
餘後素と裁り時ハ素と裁りあり
お満ろつ重働の海乃記ハ大礫の
次ハ八的礫上原沖與海と経々
總會ハ入るとわりとれどもハ等ハ
地何レの所云るとしきん知人
か

山王原村

相列湯ハ湯二列熱海と云
乃程東海乃内ノ書入ハ内ハ
本文混雜ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
夏小記ニ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
熱海ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
乃云々
是と云見わくハ湯治業
内云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
云々

熱海ハ小田原ハ六里余

田原中ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

山王原村ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

山王原村ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

治業ニ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

と戦い作ら回子市新志其儘候
其之預令し亦也後人碑と建

手押所より松室海村と云く
か小濁小條水と村人小元小云く

此地水かしと不与空海是小ゆて
加持とく水と持あど是より東小村

水ありとく飯と炊こと不能但生米
と儘のそ放す所の人米わむ村と云

根寄川村 川が橋と前より國守
小田原城主の持あり根寄川石

あり和分り
給の浦村 此地土赤とく朱砂のどく

赤沢村 此地土赤とく朱砂のどく

村に記事堂あり 姓古當人記
世多し像と海産に得て安宝と云と

河橋村 是も養谷足高橋と云
也い色と多く石とあり村人石工也

伊豆石ハ皆い色とあり山と一かたに
石と劉く場あり

大肥村 海濱也漁家
より濱村

門河村 門河橋
比法

海濱に松見の古方。仁住帝の時
御業は人初ら忌徳身等と云は
しと云と走湯と石をく別当般若院

後山 新田と信二 湯之湯と信

新田 大町小町湯家古

七軒下町。小町。上町。新田。新宿

温泉味ハ若ク鹹一海ニ近ク探

温泉 湯之湯 湯之湯 湯之湯

不沸 湯之湯 湯之湯 湯之湯

入湯 湯之湯 湯之湯 湯之湯

痰飲 湯之湯 湯之湯 湯之湯

脚氣 湯之湯 湯之湯 湯之湯

脱肛 湯之湯 湯之湯 湯之湯

テ最妙也 湯之湯 湯之湯 湯之湯

生熱 湯之湯 湯之湯 湯之湯

疲也 湯之湯 湯之湯 湯之湯

切也 湯之湯 湯之湯 湯之湯

眼眶赤爛 湯之湯 湯之湯 湯之湯

飲右 湯之湯 湯之湯 湯之湯

平石 湯之湯 湯之湯 湯之湯

法麻 湯之湯 湯之湯 湯之湯

野中 湯之湯 湯之湯 湯之湯

水湯 湯之湯 湯之湯 湯之湯

上右 湯之湯 湯之湯 湯之湯

温泉 湯之湯 湯之湯 湯之湯

温泉 湯之湯 湯之湯 湯之湯

温泉 湯之湯 湯之湯 湯之湯

温泉 湯之湯 湯之湯 湯之湯

温泉 湯之湯 湯之湯 湯之湯

そよ二湾あり一六浴室に中あり
如彫て湯を貯一六海畔大石盤
岸に置て湯を貯りて人想子と浴

伊豆山 伊豆権現の湯

上野山 熱海に後東西より

念佛山 和国に南

日金山 熱海に一里三湾あり

比山最高山嶽也絶頂に石也地花

雲あり

初湾 熱海に海路三里

旁花小云沖小湾也區收岸屋

伊豆是なり伊豆小今初湾也

大湾 熱海に十八里と云

錦巖窟 観音窟

右南に海崖也再向て北のり

基盤石 念仏山に海崖あり

横溪 熱海に海畔石決明あり

和国城 和国村に海畔熱海に後

糸川 初川 和国川 皆熱海に

湯前権現 上町小なり

今文権現 七面大明神

本宮大明神 大津社

小宮 伊豆権現と云宮と云

湯前権現 伊豆権現と云宮と云

湯前権現 伊豆権現と云宮と云

湯前権現 伊豆権現と云宮と云

古井原 信長推現西水にわたり

山原

温泉寺 二寺山流

誓願院 浄土 大乗寺 法花

右左内路神社 佛掬りありて

と古略々

熱海古分一日程

三浦の入り 小條の入り

網代の入り 伊東ヶ崎の入り

湯分記

宗雲寺と地蔵堂とあり古在
町程中より入口に橋あり是

五ヶ町程より八ヶ町湯入る物也

湯の門を以て仕切ると云ふ湯中湯

下湯云縁湯と云ふあり内湯は福住

九ヶ町より五ヶ町と云ふあり湯ハ

大形腫れ物瘡毒に効めると云ふ

入あり是を以て根との内山中に湯

七ヶ町あり是を以て根の七湯と云ふ

湯は次湯中十町より五ヶ町

之家の石牌あり是を以て八町と云ふ

常会傳の大寺阿育王山河内院

寺あり湯は此の湯は八ヶ町湯滝

と云ふあり熱湯は二ヶ町あり是を以て

湯ハ較多し湯ハ熱湯也

地苑 十卷 五等石塚
海中云石塚

東海傳七傳卷之二 終

東海傳七傳卷之二

小田原 箱根 坂路 三里八町

○町入口より

入り小田原合戦の陣場 町中三三三
熱海に有

町中より箱根橋あり 和泉

虎屋より分れて、あうと書た

家根切之 町入りより、小田原

城 大小あり、高城、谷上、松の幕

下大森式部大輔實頼、同甲斐守

整息信濃守頼朝、居之、熱海、

二月十六日、小田原、長宗、

夏列垂山より後、居城を築き長氏
氏依氏康氏政氏連之代九十七年
志て天正十八年没落の後、秀吉より
園東八ヶ岳を式部四十七万石子石
東照宮より賜せられ、時大久保七市
右馬忠世小揚り子相模守忠隣配
てらるる、所盡城と成元和のころ
所始備守り正沢小揚り又寛永の初
所盡城となり、同九年稲葉丹後
正勝より賜ひてより、為城を小及小

○ 風系

たの秋山と石垣ふと云秀吉の石垣系
陣の代中陣の代に礎をどわり

馬生寺

入字多 小田原ふがら水史

長真山海菜寺、稲葉若港ち入
道泰翁の建之因山、黄檗、欽牛
和尚也、入口石壇三百級あり
本堂 禪堂 食堂 方丈 鐘樓
社所堂 徳輝堂 泰翁軒 庵下を
結構志治り

山見村

早川村 夏列熱海の乃り早川
橋あり、以川の末と早川流を承久
の礼、小系村、甲斐、参議、中将
範成を因て、鎌倉下りて、以川流

東山記
二
沈めぬ元弘の乱。参謀平成卿（平成卿）より示
して斬まぬ

坂上守母

うつろいと我思ふよる後や早川入
せくとせくとし（かたがは）高きし
安嘉門院（安嘉門院）曰條

東海の内ゆさくを越えて見越せば
志が未だうき早川入りあり
曰条平の度勢が母して安嘉門院は
久住よりが家卿の後妻と女と

為相と生り為家卿薨後為氏お
相領家の争あり、此の為か母子後念
下ら生し、曰条ハ者家卿を、阿仏坊と

いへば此の紀行あり
右の谷より来玉は

勢及坂 太刀矢之の木の字あり
湯子 入口小三枚橋とて橋二あり

此下小並屋あり、塔は法一十八所
屋敷の門 宗雲寺領也

村の入口右方小早雲寺とて、お條
家の寺あり、元祖伊勢朝九郎平

長氏ハ彼中よりおて伊勢伊勢方の
一發して今川家へ移り、終小自三

て小田原小指領、板ヶ岳を領し、利發
して早雲屋に宗瑞と号し、九十歳

おて卒し、此寺に葬らる、又うり、曰代の
乃ハ女を領し、皆此寺に葬らる

裏小石塔並ひてあり



東谷卷三

三

連秀作宗祇法師といふ寺小舟と文
 龜二年七月廿九日終るい寺よ石

碑遺像あり 穉世

とらふしつとるの林乃りりりりり

遺像と自讃

とらふしつとるの世の憂し

世小舟りハきつる小舟の底より

宗祇の紀列の人三善姓飯尾氏小舟

洛陽小舟り十任心院心教傳於子任

ひ連秀の家通とかりる洛小舟東

野列幸縁小舟り古々集の秘と極

洛小舟り古々集と道遠院実院

公へ供人まより 祿石院公條公三光院

東谷卷三

三

實松云細川二位法平基決玄旨
八條智仁親王中尾通勝入道也足軒
一修也修 後水尾は皇太子御成
一治よ七宗祇より起せりといふ

湯本の湯

記 高小年記

湯本の地蔵

早雲寺の足立と方二

入帝が足立石の前ありるが就堂して

○ 湯本がたにあり

昔ハハ不承舎らうん長めが記小僧根
ふとらして湯本小室とといふ

此わけ坂

一登水今ハ所てかー今ハ所て一
下りて又よらあり

ありきうとふふ志のぶ石とて大帝が
左の志のぶとさう一みたらと云は
わり又矢の根石とてかりまこの地
もわり

くづも坂いさむたのたの景の
くふらり

右不志ひの湯山の坂も水ある
よくも法 川むだの景屋とて云

とくも川橋あり

世よりぐ坂 昔廿のころとて一
るともあり 文庫とてんゆら

より石坂 昔紙とてんがたの少く
ぬ方と切たさうすさ石をぬ

八幡(彦)落(り)し 右(の)山(の)高(き)菜(菜)

城(の)江(江)り 大(大)坂(坂)

相(相)の茶(茶)屋(屋) 徳(徳)宗(宗)屋(屋)又(又)心(心)持(持)り方(方)屋(屋)

系(系)り

○ 皂(皂)角(角)坂(坂) とう口(口)小(小)塚(塚)り

檀(檀)本(本)坂(坂) 首(首)八(八)が(が)の(の)本(本)ま(ま)り(り)中(中)江(江)坂(坂)

長(長)け(け)馬(馬)ま(ま)り(り)下(下)り(り)て(て)江(江)一(一)海(海)道(道)

の(の)託(託)ま(ま)万(万)俣(俣)峯(峯)高(高)し(し)樹(樹)根(根)小(小)ま(ま)り(り)て

勝(勝)と(と)呼(呼)ら(ら)ず(ず)咫(咫)叢(叢)陰(陰)し(し)苔(苔)の(の)露(露)と

か(か)ま(ま)り(り)て(て)脛(脛)お(お)の(の)ぐ(ぐ)も(も)り(り)か(か)し(し)い(い)思(思)也(也)

後(後)法(法)坂(坂) 坂(坂)ま(ま)り(り)後(後)も(も)ま(ま)り(り)と(と)り(り)

ま(ま)り(り)の(の)口(口)江(江) 吹(吹)込(込)

追(追)平(平) 右(右)八(八)字(字)子(子)心(心)た(た)た(た)文(文)席(席)心(心)

い(い)字(字)子(子)心(心)八(八)字(字)ま(ま)り(り)て(て)並(並)ひ(ひ)て(て)丸(丸)く(く)江(江)

ま(ま)り(り)し(し)入(入)り(り)也(也) い(い)た(た)の(の)只(只)柄(柄)心(心)八(八)は(は)

然(然)ら(ら)ず(ず)も(も)し(し)こ(こ)ら(ら)小(小)八(八)字(字)心(心)入(入)り(り)也(也)

富(富)士(士)心(心)信(信)列(列)駒(駒)ヶ(ヶ)嶽(嶽)心(心)入(入)り(り)

白(白)水(水)坂(坂) 八(八)所(所)坂(坂) 右(右)方(方)茅(茅)の(の)

湯(湯)乃(乃)り(り)ち(ち)若(若)根(根)し(し)ま(ま)り(り)た(た)湖(湖)也(也)

湖(湖)水(水) 高(高)山(山)の(の)底(底)小(小)大(大)池(池)わ(わ)り(り)も(も)不(不)

思(思)後(後)と(と)し(し)も(も)易(易)に(に)賽(賽)ノ(ノ)卦(卦)し(し)良(良)心(心)下(下)

坎(坎)水(水)上(上)小(小)わ(わ)り(り)も(も)又(又)心(心)の(の)輪(輪)湖(湖)心(心)也(也)

小(小)湖(湖)わ(わ)り(り)も(も)又(又)性(性)年(年)湖(湖)底(底)小(小)雲(雲)坂(坂)

わ(わ)り(り)も(も)又(又)怒(怒)ま(ま)り(り)し(し)小(小)湖(湖)心(心)あ(あ)る(る)志(志)輝(輝)云(云)

水(水)練(練)小(小)長(長)江(江)泳(泳)で(で)木(木)底(底)小(小)入(入)幣(幣)し(し)

お(お)水(水)中(中)小(小)枯(枯)木(木)底(底)心(心)の(の)こ(こ)と(と)江(江)ら(ら)れ(れ)り(り)

小田原の主福榮泰家の内江村瑞賢
謀少く大本と成り長真山と建
らるる一と云り

以池は石敷奥あり

八所坂のくろまうり権現(乃あり是ハ

紀列熊野と同社小とて伊伴冊書也

天早宝字年中満月上人草創也傍

信救が縁記小八万巻と書り信救ハ

本名義仲の祐筆大支彦覚也

安貞三年十月焼失の内小原泰時再

真は社と伊良走湯山と表社権現と

て誓紙小加らるる公家より小原

教り也治養の比石橋と敷軍時時

新初造りてい心の朽木の中小執事居

一幸小免れ神助とて其後と書り宗

一系拜を幣額かて小原家相繼

て宗教一岡東十二列結護の神と

今少聖々 將軍家の結を分りる

我共帯し幼少の附けし小居りともり

笠根山東福寺金剛王院宝物

友切丸 宗道太刀也 長三尺五寸を銘

清斎太刀 赤銅作り時宗是めて物経と河

長蘭太刀 長三尺五寸銘お打あし平にも切込

赤木のさすさくく付くぬけは是ハ結縁袋

柘葉傍の付時宗赤くは是もやう結つる

こころハ赤銅あては小竹いしと彫

夜光玉ニツ 駒角ニツ 長サ二寸六分
号ニ寸七分

九穴貝 独鈷一 牛玉 寺五方

麻玉 寺二分

鈴 大所海州の用

天の石衣

頼朝御前の揃一具 寺七方幅寸 一分 寺七方幅寸 一分 寺七方幅寸 一分

弘法菟珠教 同經

菅葉相し經 劔

阿宗自筆状

萩前陣火急消火寺安徳院 寺百条曲一帯而得之怪法也

阿宗

寺福寺寺文

是ハ小寺ね撫ち阿宗少寺福寺

七徳念之山也若日一三九み寺しと

天下の執権より浪人の入多と堂院

寺ハ世以て大義行ると感づく也

阿宗の社 河新わり

お口さの河原なる也

さいの河原 地蔵堂あり

右の寺と堂ヶ浦と云中に寺々あり

三ツ屋

○ 三ツ屋お口寺 阿宗寺八町

新屋 若根入口也

園不 小園系城を教之一切の寺人

経炮武器と改り池文ありとて寺を

経とわをさるるとのハ悉く寺主人に

の形とわくゆ也

水飲味と云 峠の頂也和家也

小糸附の兵源高氏と水飲峠小拒

が不交して退き大崩小糸大崩ハ

元お根の意かへて建武の乱小糸

利直が峠を陣して義貞と頼直

が敗軍一竹の中此戦高氏討つ

得て京軍敗れ義貞引退ハ

大凡小糸より之峠へおる竹の

南ハ熱海小ハ足柄ハ少テ甲列ハ

乃也若根ハ其中ふくまはり

治養ハ石橋ハ助軍の後村竹ハ

隠れ居て小糸の多と足柄熱ハ甲斐

の由ハ少テ逸見武田ハ小糸系安田村の

源氏と備也一俣ハ地理ハ熱ハ

小田原ハ方ハ方ハ熱ハ四里ハ

矢倉江ハ一里園ハ方ハ足柄熱と云

峠ハ駿列ハ列の境也 竹の下ハ

里 ともともりハ四里 甲斐五音園

四里 竹の下音園の方ハ少坂天林津

駿列甲列の境也 谷村ハ三里 くら

ぬたハ三里 以方ハ谷村よりちろ坂と云

初より村ハおる甲列ハ也

竹の下ハ中山ハ三里 林ハ三里

さの二里 三徳の二里 二の二
後身が昔使きたるあり
竹の下は尾山の林也

猪拾遺 長時

足利の山乃林より竹は下り
一木宿うろ竹は下り
八重の山は尾山の下の方山也

中務

竹の下の山は尾山の下の方山也

新子載

さしふ今初と申すは只柄法
雲の八重の山に宿うろ竹は下り

風雅集

尾山

ゆかりの山は尾山の下の方山也
花の香あむ竹の下り

箱根記 三徳へ二里止八所

秀少く蚊蠅が

町の方八相摸ふ才方八伊豆也
町の方八相摸ふ才方八伊豆也

志やう町 町の小庭 町外二大塚有

向坂 赤石坂 岩石坂

風越 境本 伊豆後河も境本有

ろろ早 葦山城終りゆり是ハ少糸

足利氏親の望く守り一也

甲石坂 甲石あり

石原上り口

石原坂 足先ニ新又帝が坪と云ふ有

大さき木坂 小うき木坂

山中 系屋あり二里

如桑の附け下は城と築らる如桑は
 左更氏務男文を前守と号ふに守
 らしむ者有る東作之様子赤坂中
 村一氏等と以て是と攻む一氏を
 源辺劫を東守徳光等とて勇名と
 揚け一柳伊豆守等討死すと小田原方
 中とる文と始大塚討死すと氏務
 落去せり工谷城は町をづれたの方
 又塘をどわり前水飲地産とて人
 の耐敵味方よ水と飲せたりと云石佛
 わりともふ先大子口の跡も今にあり
 右側小宗間寺と云寺小田原方とあり

二族の石塔一柳伊豆守の石塔は
 かのの坂より並ぶたり

上長坂 是より伊豆源河田高に
 上

○ 長坂より

大時取

笹系 系屋あり
 妙善寺 左角

下長坂 やまのり

三ツ倉 系屋あり

うまをりむらび坂

玉沢 左の方へは常経堂七面あり

一の山 系屋あり

塚系 系屋あり

○ 初巻う原 二ふねあり

今井坂 左=壺岩社あり

おろし町 三河入口ニ小橋あり

いささか下より伊豆海へんゆり

徳倉右大臣

若指落と我然く見し伊豆の海を

沖の小橋小流乃より流るる

人 齋家集

足柄乃ささふゆらんむらけ

三河 沼津へを里才

た=河館の江あり

明神社 右あり 少先の右の細川

いささか下より伊豆の海へんゆり

神事 鶏年 一の林ハ伊豆のこ

崎より橋まで三社あり中ハ大山祇の

神事 神乃小三河 高の仍とて秘

事也伊弉諾弓 軒遇実智と將治

ひて古生とる如の神也伊弉玉 紙智郡

三河と指列流下耶三河 轉社伊豆

加茂郡三河と三河 同作也伊弉伊子

少早靴之玉司実徳 面の形不能因

法師子分よまをりて

三の川 苗竹より小せささくを

とくもりおとし大ぬ浪たりと

又鳥丸光磨々 赤石小ぬ降つてさい

弦小割つてに法水 へ若根くせり

ぶさ根く洋谷せに三神 之信て

天の川并冥の水とせよとあよ
 今も三時此れ神ありて神
 と仰せし神威ましくて向ふ天
 性暗ありしとあや 於此のま
 宗ありて活業曰年々回固多く
 所せし頻よと宗せり小糸し経を
 して是を南三里行わり今もま
 わり蛭が小糸も小糸の所乃田畠
 中糸田治あり 山本別友が鉾小糸
 近辺二十町計ありされど之は
 久也よ美濃が宗任あり際小糸
 清らり小糸とせし一未討ふせし
 かり小糸家代は三河と任作せり

長めが伊豆の玉舟不到り三河の社と
 孫正とわり傳名沙小伊豆と
 田方那あり之河ハ加茂郡也不家
 此河ハ古より於此にありし人
 其を鏡とて代々傳と作る者有之
 曆とてり小糸権と久しく死たれど
 安倍が宗五氏の口とてて交ふ
 かん

六反田

千貫樋 伊豆三河の境あり伊豆
 とてハ東小相模西は駿河其つらふ
 と云ふなり曰く武蔵の東征の後
 れたり也け梅ハ伊豆の水と駿河

吉洞千貫と云て水の料小せり故に名
とせり

諸河新宿 向ひ新宿と云

伏見 ○

長法 八と云云 八幡文あり

菅瀬川 三雄文堂上人出たり

橋のまきより右一町程ゆき龜鶴

山観音寺と云寺ありなる龜鶴

守にまきり基の作観音也諸河此

三毒目の札下也門前子龜鶴が墓あり

此龜鶴と云龜鶴念の所今の松女也

大塚山虎坂坂坂のわゆる菅瀬川の龜

鶴と云世お名と云一若くありしが

貞義と守りい川(方)とかけ一車
細記小のこー 海乃記小中細云

一節のそと細一り

りかまのつら方と云と流の原まき
所ののたそと云とまきと云り

黄瀬川村

治義の記は平家大軍と保一と云

と云と云た程約十方の兵と云一程

舎と云一いおふと云一人のわ年弘敏

小ふと云程約小浦せし事と云信也

お見るとは合身九命家経也と云奥

川小下り秀徳と程と云りか程約

ると云て西流の兵と云て云ふあり

又文治年中家持平降小を付ん

とて程の徳念よりいふ可なり一に
其後系と云ふは是れ是方地りぬ
建久年中程の上流の村に高木宿
一は若くは高木と云ふ宿あり一は今ハ
百姓の宿也

石田

其の川も金ヶ淵と云ふあり山王の口
小なり一谷と云ふは其の谷なり
よみてい淵(たまり)は川の下にあり
らと云

二ツ谷

山王村 沼津入口

山王社程の堀り富士の牧場の村の牧
舎金あり

沼津入口

河曲(かまが) 川向と音(ね)と云ふ所
くがり下也又、雲山寺と云ふ所の
門小北流(きたが) 自ら建(た)せしと云ふ所
を望(を)むの石塔あり

車返村 是れ徳念之村と云ふ所なり
と流(なが)の村い村小名なり

沼津駅 京一里半

三枚橋 入口の町也 此の橋は
今の町屋(まちや)の郭(くわく)なり 水(みづ)流(なが)る
の比(ひ)は三枚橋城(さんまいばしじょう)と云ふ甲(こう)列(れつ)の村(むら)なり
跡(あと)之(これ)多(おほ)く昌(まさ)昌(まさ)居(い)てと云ふ後(のち)高(たか)坂(さか)入(い)

予々天正に八松平周防守康重^{マサシゲ}病之
小田原の没後^{チヨシ}中村武敏^{タケノリ}氏才武を
誘つて一宗領二百石居之、是長十八年忠作
治為忠作^{チヨシ}揚り、是長十八年忠作
死して地破却也
川くま町 此町は江戸尾七里の船小
宗正をくして早くゆくと、西風のかは
寄るべし、すきるの事

長崎

八坂をいふ所の松乃末を
とくにいづくにゆくと、此れと云ふ
天正の比、小田原粉切と云ふ、今の松平
も、後極たり、松平の中、小松も、宗正

八坂海よりかきと、也、林中小光松一
株あり、六代松と云、文治年中、小松時
政上洛を、平維盛の男、六代時義と
洛を、捕へて、よりい、而して、院小切と云
し、い、雄偉、文章、経念、之、と、程、知
小信、六代の命と、極、い、多、小、是、才、多、
其、死、と、免、れ、り、四、代、也、六、代、八、倍、と、云、
り、後、小、信、友、の、中、に、あり、後、念、多、た、江、河、
東、の、堀、也、終、小、折、き、ぬ、後、小、好、事、の、
と、の、い、前、小、六、代、の、心、塔、と、な、り、た、の、言、
小、わり、
二、反、田、 是、より、宗、と、大、形、村、と、云、
宗、ま、か、ど、 大、お、り、と、云、ふ

東各巻二

十六

小笠原 的弥方
大正坊

○ はる裏のたぐり

松永 今沃

之中松 大正坊

八原 三里 元八二里十六町

お日小 同屋新田 名流

一か松

真玉寺城跡右小見山
今川の城跡より伊勢新九郎といふ城跡
早く自之して伊豆へ移り今川元之
元龜の比八甲列りり穴山梅宮家臣

保城持初と云ふ者其の時村和武
家人川毛忠房其居之者長六
村三郎兼康京不賜以同十二年
大抵之家人京田村の氏を教
井内甚助所て康京改易せられ城
破りせり

浮城が京 富士のとき舟の浦か
南八海也昔ハ富士足守のつら横をり
の里と云ふを色は柄越しくい
高野神宮眼觸織の旅人の名
りすと云ひしはひく海よふ
のこゝに浮城びて故小ゆれありと
打寄るを以て今の街名ハ



故に浮橋が東と右有たり東約三十里
 六町 七里あり海乃記小名浮橋といふ今
 八束むらふて流少く流まじり

長崎
 東海より北へ流るる河分て
 神小波より流流り原
 西首
 河純

河の故流花々流りて是年
 河方ぬき中より後京極殿着原基以
 源有長の言と透達す

活業の供よ本首り前件と透付れ
 たり上流の時橋系京極の系のなるこ
 而小登て我慶堂ふまらるる河と
 是下前作本首経る生念と河

東各卷二

どうして懐然を起す一和史元弘の記は
源氏民の男竹若丸縁念と道は後
系(仍)をそとと東使の治(う)ゆり
をそ捕(し)ひ(し)ふ(し)て斬(き)る
右の方(かた)の標(しるし)子(こ)弁(ひで)と云(い)ふ
寺(てら)と云(い)ふ古(ふる)寺(てら)八(や)杉(すぎ)郷(ごう)の末(すえ)に
住(す)み下(くだ)之(の)を道(みち)と(い)ふ野(の)の庄(むら)と云(い)ふ

○ 溪(たに)た(た)た(た)ふ(わ)り

助(すけ)多(た)米(こめ)新(あらた)田(で) 若(わか)くは浮(う)つ新(あらた)堀(ほり)の橋(はし)わ(わ)り

二十(にじゅう)年(ねん)新(あらた)田(で)

柏(かしわ)系(けい) 海(うみ)后(ご)河(が) 渡(わた)河(が) 柏(かしわ)系(けい)わ(わ)り

う(う)か(か)と(と)云(い)ふ庄(むら)と(と)云(い)ふ
わ(わ)り茶(ち)の浮(う)つ庄(むら)と(と)云(い)ふ
東(あづま)邊(へ)と(と)云(い)ふ

河(が)を(を)る(る)い(い)つ(つ)

○ 松(まつ)系(けい)

柏(かしわ)系(けい)新(あらた)田(で)

檜(ひのき)木(き)新(あらた)田(で)

大(おほ)井(い)新(あらた)田(で) 元(もと)名(な)系(けい) 今(いま)井(い)新(あらた)田(で)

○ 元(もと)名(な)系(けい)の(の)元(もと)

川(が)井(い)の(の)大(おほ)橋(はし)十(じゅう)九(く)百(ひゃく)川(が)下(か)子(こ)三(さん)保(ぼ)と(と)云(い)ふ
水(みづ)の(の)落(おち)合(あ)わ(わ)り(り)是(こゝ)に(に)干(かわ)の(の)方(かた)に(に)保(ぼ)寺(てら)
寺(てら)と(と)云(い)ふ寺(てら)わ(わ)り

富(とみ)士(し)の(の)元(もと)名(な)系(けい)と(と)云(い)ふ

富(とみ)士(し)心(こゝろ)は(は)心(こゝろ)八(や)人(にん)皇(みかど)七(なな)代(だい)孝(こう)靈(れい)天(てん)宮(みや)の(の)大(おほ)井(い)
年(ねん)日(ひ)近(ちか)江(え)の(の)水(みづ)は(は)決(き)ま(ま)り(り)て(て)水(みづ)一(いっ)粒(つぶ)も(も)漏(こぼ)れ(れ)ず(ず)
富(とみ)士(し)心(こゝろ)は(は)心(こゝろ)八(や)人(にん)皇(みかど)七(なな)代(だい)孝(こう)靈(れい)天(てん)宮(みや)の(の)大(おほ)井(い)
富(とみ)士(し)心(こゝろ)は(は)心(こゝろ)八(や)人(にん)皇(みかど)七(なな)代(だい)孝(こう)靈(れい)天(てん)宮(みや)の(の)大(おほ)井(い)

明日ハ金輪際多ク無事トシテ凡人
百日精進垢離トシテ六月朔日ヨリ
十日の月毎士禱定メテ覺テ也を御出
の人七日精進を以テ食テトシテ 聖徳
太子甲斐の志弱小弱テいふまゝに
御初ていふ小食テトシテ後空海
御食テいふは縁とる小刻ニ食テ
泰徐福が不死の薬を御尋テいふ
止まり蓬萊島トシテ名事ハ其地ニ
よわり揚文公侯花馬成文獻通考
宋史ニテ日東の曲其外異胡テい
ふと御事トシテ勝才之ヲ茶長
と西室経海(清)トシテいふ人ヨリ也

日本ハ新夷の船連ハガリトナリ
比山の神社ハ平城天皇大田元年建
わり地志の神社若狭後河内富士郡
神社トナリ本花園那非トテ大正
の母マシ檀々杵その妃トシテ
橋大カ神社トテ天トナリ橋樹
新花園花園那非トナリトシテ
御徳神六彦の口其三彦大正
大カ神社トテ古く御事トシテ
トシテ大塚カウニ時々御事トシテ
トシテトシテ又竹瓦物所
トシテ桓武天皇延暦二十年の事
ハ空カウニ御事トシテトシテ

一カ多末

らぬくくハ玉の依りくくハ
ふしのさるるの法は
富士の海客もさるる
かを祀せり又近代のさるる
依りくくハ

よのふれはくくハ
こくハ

物白くくハ
かちくくハ

けしらぬハ
かのこまはくくハ

風をふくくハ
けしらぬハ

一休

中身のさるるハ
けしらぬハ

乾家平

大地撮来無寸土 當空還見此山成

海瀾線浸半邊影 多少漁舟載雪行

惺窩

青天忽見素羅笠 羅笠擔中十五洲

石川丈山

雪如純素煙如柄 白扇倒懸東海天

いふハ甲斐後河相摸のこまはくくハ

伴舟伴勢遠江三河伴之成と野不

野と鏡下鏡舟舟十五玉の壯觀なり

延暦十九年三月十四日富士山の鏡原

八巻之三

燈火燒おを八雲燈日と散て暗水のよ
 水へ炎光の川は映して白日の如く火声
 迅雷のよとくは雷大ぬと船く四月十八日
 一燒止りぬ續日を後紀は法和帝自
 觀六年六月十日計燈火燒おを止
 山と磐石崩生て海を入るありて後
 燈はた大燒る事ハありて燈火の比
 小なるハ燈したるごとく古今集の序もん
 えたり燈曆十九年より九百八十年
 室永四年丁亥十月廿二日己刻より九
 己刻と震動して江ノ口と大高のよとく
 千餘子ゆきとありて山の東後よりや
 十王を付ひの木にけりてとありて燒お

一毎日小石燈と前へまうりて燈火の
 らるは十二月九日丁酉の朝八雲を
 滿り給わハ砂を滿りて武延の守
 小及りまうりて燈河をてとれハ後
 洞窟東岸より小とありて燈玉ハ
 是よりハ富士のありての事なりと
 是事ハ念ふと事ありて燈曆十五年二月
 吾海真が事十日後にたて後と
 水神の告りてとありて後ハ
 新山と云頂上と給りて事と云ふと
 わり人死と云に回老常入てんし
 地母の瀬をぬれ大山よりハ必
 一俗といつハは是よりハ富士をたけりて

足とあ身たりしとを奪ひて其の跡跡崩
さる所なりしり 和定なる男其れや
遠きふり二年と云く其の跡跡崩
の跡跡崩りてふりしり其の跡跡崩
久しく跡跡崩りしに其の跡跡崩り
りてふりしり其の跡跡崩りしり
其の跡跡崩りしり其の跡跡崩りしり
一と云ぬ

後系村長経云

一しりしり其の跡跡崩りしり

中系 依田村云

河光寺

よた橋 小橋也十あり

吉原跡 浦原に二里も大所あり

大のち吉原守河内河内あり跡の

石取也治景の役、本家の軍云々の

おまは移りて逃走し一軍士活し云は

吉原守あり 大神君の御前あり

出河内ありしと候定なり 御老の

跡跡崩りしり其の跡跡崩りしり

本家の軍云々の跡跡崩りしり

よ迎をぬ奇士と云く跡跡崩りしり

ひりしり其の跡跡崩りしり

りりしり其の跡跡崩りしり

ちしり 又今も本村と云く本家云々

東谷集

此のまゝをうとて考ゆ人の指す
以新とてたの心は久余の心を
漢方の社あり六家文不はあり
三日多れ流鑄るあり

新にた 吾系古口

古河

古河

古河舟川 古河舟は 古河舟の橋あり
和名鈔 富士郡古河家橋川舟之掛
蒲原と同郡相並とて今の古河舟
の事あり一は河大文流舟の事あり
古河舟の古河舟の水源は古河舟
の系あり 古河舟の事あり

○四市場 賀茂とて古河舟の川酒

あり 古河舟と平維也と對陣せし古

河舟とて古河舟といふ

古河 古河 古河

古河

古河舟松林とて古河舟の事あり

古河舟とて古河舟の事あり

古河舟とて古河舟の事あり

古河舟とて古河舟の事あり

古河舟とて古河舟の事あり

古河舟とて古河舟の事あり

古河舟とて古河舟の事あり

古河舟とて古河舟の事あり

いさよとて^{下の}岳と云^つ河原と切たふ^り

富士川 吾系と^く津系よ^り其^中也^の流

其^た年^々と^る其^の定^まり^しる^所に^は流^れ也^の二

流^れて^は其^の水^も毎^日に^は流^れ也^の水^上と^ハ

信^列八^ヶ高^{より}流^れて^は甲^列に^至り^て

谷^を下^り川^に注^ぎ入^る早^門落^合て^は大^河と

なり

長^の明

吾系よりた^は河^を其^の淵^へ入^り一^里の^内に^は

あり又^は富士川^の流^れに^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

遠^くなり^て其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

延^びて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

中の^の郷^に 其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

小^の池^に 入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

○ 小^の坂^との^下に^は 八^町坊^に 八^町坊^に

中^比八^下の^所に^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

流^れり^て又^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

より^は別^の所^に其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に入^りて^は其^の淵^に

おわりとて後より小北流をいひて其母
系伝と十二段作り浄まり河家の始末
と書きて後藤藤原より保徳許小散と云
と分て行らせりより今も平家よりあ
らざる事よとわさすらたをものと浄まり
と云ふ是より始まり於て八吉田氏より
信吉と秀吉と云ふの世傳より分はせり。よも
宗鑑と云ふ政筆子と号し侍人也

定家卿

河内の人と云ふ事よと云ふ事よと云ふ事よ
め此れ事よと云ふ事よと云ふ事よ

家澄卿

河内の人と云ふ事よと云ふ事よと云ふ事よ
め此れ事よと云ふ事よと云ふ事よ

三河系伝 蒲系入口

蒲系伝 由井一里 村系と云ふ事よ

依石抄云唐系郡富士郡ニテ亦も蒲

系なり是ハ富士郡也形如ハ形如と

流の付ハハ名也

右の方ニ河能の流あり 流ニ右城の流

小田系より小降部ニ寄徳を云と云と

云 一年武田信玄押寄云流城と

右の方と云ふは別々の内村あり

たハ名流流也

白田村 河口白田川と云ふ小川あり

川田村 河口白田川と云ふ海あり

こかね 中村 川流

芥沃 村沃



由井浜 直津へ二里十二町 右ハ二里
 所の門あり 右ハ湯屋云々

臣子浦 或ハ田代ノ名也 浦云々
 浦系より江戸までの門之保の入口に
 澳津の名と皆田子の浦と云 海名
 塩竈也 聖武帝の御時浦は深
 人跡合せぬ 蘇と云 海潮深
 として浪花を打岩石は固くして
 紋多也 長ぬ記は浦系と云 田子
 の浦はあまの宮と云て赤人の所と
 観るも是れ 圖畫のこころと云る

赤人

田子の浦は打ちてはるるは白めの
 舟のさねは雲ハ降つ

東各巻三

七

石岡法所

田子乃浦の風、のどけきまの日は
まげりし海、まがりしりりり

信実

田子此壘乃者、たそけりて埋むる土の根を
雪しひくは、まがりしりりり

誠宗

真津、しるを名をよめられし田子の浦
海士乃、まがりしりりり

万葉集十九、たそけりて埋むる土の根を

和歌の海田子の浦也

由井川 水濱り

町屋原村

とど川

小田村

今宿

古宿、峠の口と云

寺尾

念法、系を立地と云

藤原

山と云、地を名、りりり

と、別名と云、勝院と云

寺、八斗あり

水と云、たたり、水の街、海濱、水と云

水と云、たたり、水の街、海濱、水と云

もてて、水たたり、水たたり、水たたり

ア、水たたり、水たたり、水たたり

ハ、水たたり、水たたり、水たたり

ト、水たたり、水たたり、水たたり

チ、水たたり、水たたり、水たたり

リ、水たたり、水たたり、水たたり

ニ、水たたり、水たたり、水たたり

ホ、水たたり、水たたり、水たたり

ヘ、水たたり、水たたり、水たたり

ト、水たたり、水たたり、水たたり

大流石高房として居候て一不也

○下の古名あり 慶隆十二所増

洞村 神作が洞といひたう一山のり

ほまり さらた海苔を妻

真津川 歩後 あり高き時ハ波早

少人用いし下流り

堀川江原百首 顯仲

谷おろし風のしをまひハ後そま

おろし海原またうまゆ 乃桐

ありまけちねのころしゆりしゆり

おろし乃海よりむしゆりしゆり

もいしとまき方人なりむりしゆり

我れはしゆり田子まら呼坂

○ 漢津流 江尾、き里二所

羅山の是多湖の浦の事也ト之

○ 入口町

は張ハ昂清見深あり若ハ園門

て清見の美とよ傳若沙後河玉

慮京郡息津於本城こり

長明が美屋の名を布たみと云

昔美さの右とあり後そ石ま

たるとあり 延暦の比奥列の如

多丸謀反しゆり攻より坂上

田村九之賊自て奥列へ逃ゆり

不あり 又養平身中平相門謀反

の附者系忠文征東大將軍と云ふ

東各長三

三十一

多こととら内ゆつ院子平貞女友
糸秀卿たたり付り之やてゆり付
古詩と吟して

魚舟火影冷焼波
驛路鈴聲夜過山

はふたの海にわく石山をくしりて
しる雲九舞火向白さ事かざり

後鳥羽院

信足かた安土ありやうの川ゆり
月影こかく雨後乃を春系
千載集 實言

信足かた安土ありやうの川ゆり
風乃されよ木のをあけり
續古今 中務親王

清見寺前 魚津よりかきん也

巨敷山清見寺求玉院 手領二百石

聖一因師の才子同重 禅竹用山也
近代ハ妙心寺末寺也 丹波の給子

大神君所調臺の門をさる亦ハ給
といり君舟ハ長門のくまて後唐

はせられしきし終よ善東ハオありど
安土とらわれぬれよ安土の給ハ給

とつりさる身としは給ハ善業ありハ
後子進身たつて佛殿の徳る善民の

御新しあり室物あり 大神君にと

洛の傍に筑しあり唐又泉水集云
つと虎石龜石とて 大神君に似
の石あり 堂の南に十七石の遠梅
鐘樓石物あり 鐘の下の法眼が
の石に銘ありい寺の少照愛の法を由
唐の宗徒安土足る三徳田子浦
中々益人の分

唐系乃漢人法の二條のう
ゆたふんくつとよめいしを

行紀

唐系乃漢人法乃漢ま
たゆく 今もとわうぬ浦

松本吹浪が唐系乃漢ま
之條の津津よふをいふ

奥津ら右の方牙延乃あり

柳子系 四里 是乃山谷川中

百次 四里 是乃山法

南教 二里 是乃山坂

牙延 二里 是乃坂あり

会十回

身延山久遠寺ハ平和年中目向上人

開基とて日蓮宗也

小こも法

智口とて折川ありとて折川石

横濱

唐系乃 唐後 唐法の花

太は浦乳とて唐のい不海とて辺あり

武蔵の唐系と遠あり

東谷系

三三

川とよ今川の所産系た其の子孫の
位なる城あり

たに神一が系

尾崎

おいらめ
花深川 小橋町

おつたいごう 松本王家あり

東路地土傳巻二終

東路地土傳巻二

江尾歌 府中^に 二里九九町

二里三町と云ふ

○ 入口町

ちご橋 十九町 町の中より砂堤の川

之尾より沼津へ舟よ糸川と八巴川

そそ溪畑の沼と御茶川と藤合^に也

乃家郷

日分門より子夜まうんくくの水々

川下六町は清水町也清水富家

女あや 常憲院様御時まへ

沼松尾を竹丸とあり也

東路地土傳

東路地土傳

三十三

建武の初高氏と平村の秋は
氏勝一不あり け清水うり
紫之徳は海とまきとつて天
計あり再うりよる

之徳松糸 望二里之町橋大町余
東へ長くおるハ地緯之流中
明神の多し計楠と介樹もか
松のハ芽をぞと松落毎一肉
もわり古々野るわくを皆
年七八せり二月十五日ハ馬
を教のちたびたてて五月
そくゆ也ハ高皇産靈の

穂津非也矣とて今ハ二
弾致ニ方田也 大ニ牛頭天王の社
殿は約種あり銘ハ道春作也社
楠の大木あり石もあり
居とあり六町計の
全うとて前ハ陰海
衣の松の四はハ社あり
本を一呼とあり
一面は目の下に
然ハ細田子の入口を
ゆくと教らたは富士
原産境奥津。この
能矢知。清水。目の下

子連がたり古宮子

信長くくし系くくし知て之徳久後
松めくくし竹月とくくし

神主の古田治部とて社殿百六石并松
系と竹せり 塩漬七わり 之徳久後

之徳松系 同入江 同浦 風早の浦
皆一ツ下の石をく

風早の三徳の浦すくくし
河名久人

信實
くくしとくくし

彼くくしくくし不焼て風早此
之徳乃浦子子燵くくし

玉葉集

風子の三徳化浦まどくくし
舟くくしくくし

同 後多ね院

月くくしくくし

史本集

考親

夕日新入海くくし一沖津くくし
松くくしくくし

舟の浦くくし浦くくし
又まうり船は系法水くくし

信へくくし是くくし
神名張くくし

神名張くくし後河玉盧系
とわり 有後郡公南の溪也

とくくし是くくし
天女海くくし

は溪の松くくし
れてゆきす力なく

日て送り或付まのぬきくくし

死すうたうと云流松ハチク大後拾
生々他同法作

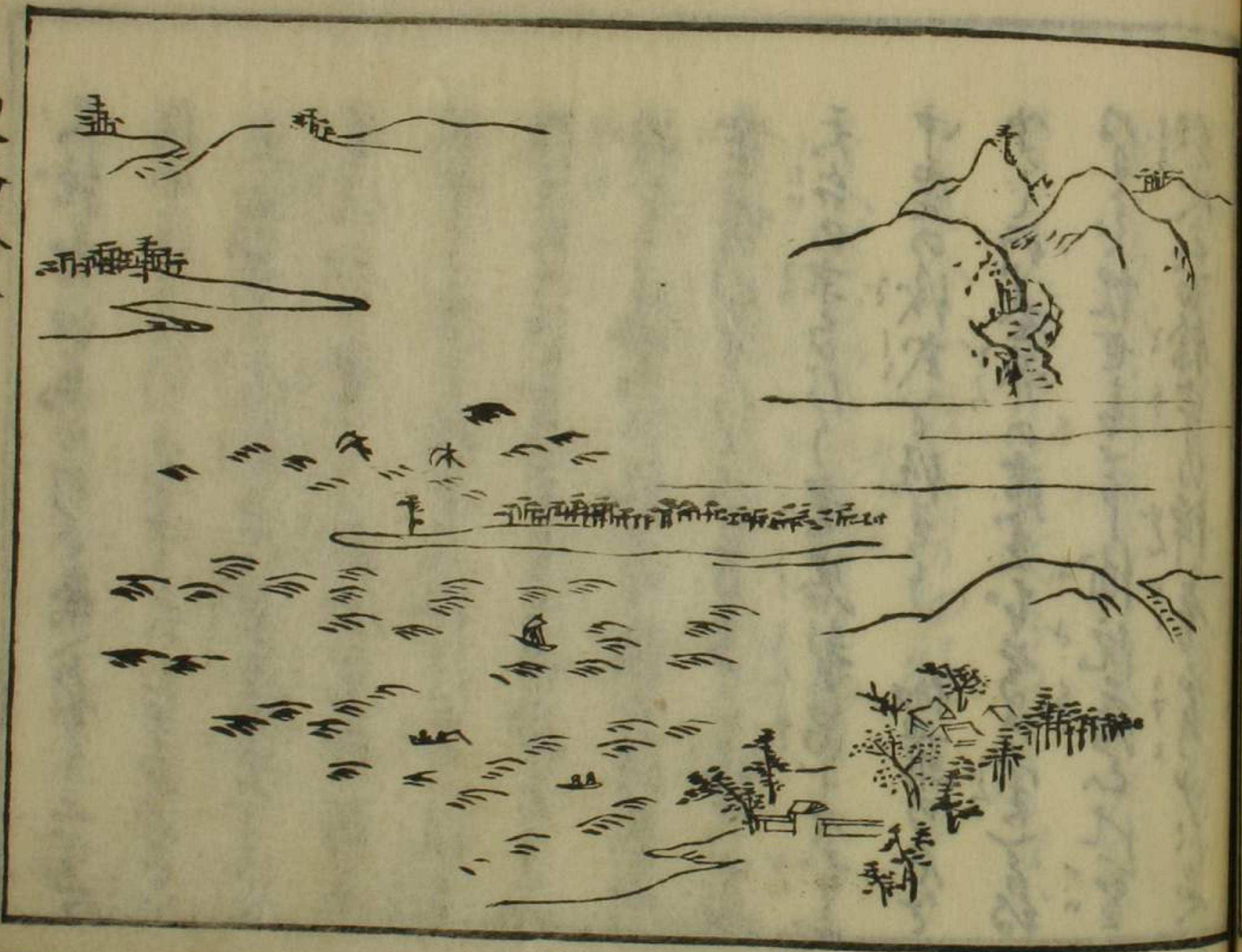
カ有後深子天のねまじりまき
ふりりん神さるふのこまあふ
おむ村補陀落ふ久世寺ハ江底う

一室在中より三室有武田位宮内付
久徳山より移すむなるハ行基の作

千子まて七飯もの一ツ也ふ似二百五
余ありて其ま家也堂大毎く有也的

八天台の暑場とつろく 以隣観
山新花寺とて日蓮宗の大寺ありと也

境より赤ともしも一富士ハ盆山かどく入
海ハ泉およぶ久松系ハ屏風と立たら
かこり一寺京堂よ及びかた



久能山ハ江尾の町南入り二里也
法水より上り音中ハ二里入り下ハ
東照宮の原届キ見屋原と云
堂塔玉と磨り社依三子石榊系
紙中子守堂坊中八杉列高ハ使言
院と云り此寺より一ヶ坂八町あり心
陰なり海原の記より後の後赤也
霊地れいぢの山并行り堂言多く鳴て田的
天台の末より堂容整昌して中
中堂の儀式と云々 伽羅の石と
中堂行基基の建まむ寺の堂と云
の寺も観世も寺補院落と云
堂也二百餘宇の淨房ありやたや

昔福川大吏といふ人の清松のり
樂と云く舞りりといふまかび舞
り又人のりりといふものごとく飛ぶ
をよ入る寺は二ツの廻廊と云々
を交えて寺の堂也と云はるま
舞樂と云て法言と始りてをま
う子孫舞人氏といはるこれに
は雅俗ありは教あり又人の樂
今中ハ此なり

長明

他より一天津し甘うねる乃
向形またり法め云々後
昔ハ天台あり一が竟弁法師ハ聖一
玉師と云り一ヶ台散と云ひ後ハ

去て御宇と仰ぐ爾を先とせり。その後
 世と仰ぐ新儀言言とあり。知積院の
 本寺より別當と知満寺とあり。いふが
 武田信玄諸河と攻むていふの要害と
 せん。寺と名然く後一山の標と堀切
 はと一山條と名を衆と入室居小穴山
 梅雪と居きり。所當家より寺
 と改布し。後 達令より依て所當
 とする。整昌也。

平田町 江尻おんがれ

近分 舟中より信水とこれた也

焼系と云々。富の中は焼くはり。

松板一わたり。文禄二年二月八日。松板

九日。馬が毒。城がその池へ身と投介。子
 冥魂。語り。旅人。立ち。先。抗。と。と。水。産
 より。泡。と。吹。れ。い。き。と。と。ん。ぐ。又。泡。と
 吹。と。也。

平河地子 以先ニ舟中より矢放たると

出系

是より。右の方。ふ。林。わり。坂。と。八。町。上
 せ。く。大。門。の。観。も。と。て。観。音。の。一。ッ。小
 て。の。基。作。り。も。也。地。盤。家。と。聖。山。と
 志。と。系。ま。え。寺。於。十二。石。あり
 大。の。つ。つ。ま。は。丸。と。元。と。わり。梶。系。と。す
 渾。と。と。七。八。町。と。と。と。と。の。頂。は。梶。系。と
 時。が。自。集。場。と。と。み。輪。石。塔。わり。と。と

日て撰書は業後向より一るの論た
 各書して是所中の月各書七八寸づ
 以て巻切はるる久の巻のありは
 てありはと。中書はらんや、業地
 山中は撰書は是編る。松平水石。折有
 山下は撰書はるる。寺は撰書の以
 鬼沙の堂あり知り。子居七人の信野
 方丈はるる。撰書の主人の在る。巻
 一乃三紀の如く。撰書は是撰書は自
 筆の所書。并困心筆。中く。我名の色
 おわり。撰書の八巻の社ハ系対。撰書
 守り小掛。撰書の繪巻也

正治二年丁未正月廿日 梶原平三景時

龍泉院殿梶勝源公大居士

嫡男光源院梶原景秀居士

二男德源院梶原景高居士

三男照源院梶原景茂居士

六男保源院梶原景国居士

七男道源院梶原景宗居士

八男心源院梶原景則居士

九男妙源院梶原景連居士

源朝家との対抗系と誅せんとなり

小正治二年正月系対一巻と
 相対の文を居て中巻は久く進行
 法は久くありぬ。撰書の以ての地
 是と名大的。撰書のありは。

武彦たけひことて、宗打むねうちと云はれ、今河平いまのへら
 と述つた矢やと射いけしに、徳念とくねんの連人ついで
 も亦またりりせむ。狐きつねヶ傍かたわらより、其その連人ついで
 唐京たうきやう小沢こさわ常じやう恒へい回かいの字なを、香か山さん小沢こさわ常じやう恒へい
 と號なづけ、原はら大門だいもんの連人ついで入い系けい村むらハ招まねき
 宗むねひととより、ぬ子ぬこ虎この寺てらの門かどを、
 矢や打うちはるぞと、流ながよ、山やま打うち死しせり、
 ぞと、九く雀さく集あり、乃なまき、ぬい、ひとより、
 府中ふちゆうへの、津つ石いし川がは淺あ烟えんの、注すぎ、

○一里山村

谷やの原はら 草くさ薙なぎと云

是こゝより、た草くさ薙なぎの神かみノ十じゆ町ちやうノ後のちに
 凡たゞ古ふる記きニ、天照あまてらす大神おほみかみと云いふ、と云いふ、昔むかし

日ひノ武ぶ彦ひこノ赤あか素すニ、征せい伐ばつのたは、い、
 流なが河がは織オリ伎ぎ記きり、野の火ひと、詔みことを、
 の草くさ薙なぎの、劍けん自みづか校がか、て、草くさと、切き拂はら
 たり、亦また、とより、本もと社やしろハ、燒やけて、修しゆ之の、
 楠くすのぎの本もと洞どうの、門かどハ、恒とこ々と大おほ本もとあり、神かみを
 赤あかく、水みづ社やしろハ、亦また、あり

小田村

吉田 草くさ薙なぎあり

たの、方かたへ、と、原はらと、より、り、を、平ひら原はらと
 云いふ、瀨せ瀨せの、石いしを、ま、て、外とほ月つきの、比ひ、
 も、谷や、一ひと面めん、錦にしんと、云いふ、と、
 より、ふ、を、ハ、府中ふちゆう、を、ま、て、
 海うみ大おほ井い川がは、を、み、つ、と、向むかへ、
 在あり

公平法寺とて馬場宗寺の所在
中堂の礎七段の礎の
像あり

西条系 あり

古沼 ○ おとふれ

倉つ 白鷺の形

瓶ヶ崎

府中入口の石を石室に招き
わり 八幡大社之府中より
海にあり 福門とた也 まがりの

府中歌 九子 石室十六町

外流河と書後よしの水は
急迅なるの流逸なりとて
改字なり

○ 馬喰町裏より

御城 大の方也 氏流河と今川家
よ湯りいふと在城とて九代相續
とてり後義忠氏親氏輝義元氏
真子あり 永保十一年依きよ
て甲列の領とあり 武田信光
十三年 大神君信松を多
十八年 庚寅の年 冥土
ひあふとあり 中村武敏少輔一氏
十六万石と揚いふと六年

子任成は揚子河十二年七月二日又
 神君江上より移りて江に元和の年
 四月於高城薨一移上後二大納言
 頼宣公一移上元和六年紀列一極
 寛永二年大納言忠告一移上同
 九年分守長門守忠告代官定長
 わり所書院延平和長勅書世一と
 室水田身事改と止れが同十年分
 又元のこととに勅書なり

淡間社 右の方西邊の西かへ延長
 年中富士かへ移し一移上同
 たり社た公本社同屋形右八社
 社とて大已貴命なりとあり一とあり

表の八名古伝の事とあり大己命
 かり樓門拜殿築き居たり一とあり
 たりと社伝二子六百名久徳寺建
 徳寺ハ表別為よて社を新文た道
 也社文四とあり

後方のこの心と撰核心とあり

風雅集

正位知家

徳たれをまゝとて心の世とあり
 勢のつらむらまゝとあり
 今物とていふ所入り衣形かけく
 たらんとたふとまゝハオホなり

忠告

らりたりと撰核心入り一とあり
 若地よりありと錦とあり
 いふの中より撰核切たあり信玄甲

列より東よりけしは日向城と云氏と
居り不也 山城の右の下に修海

寺と云今川代々の菩提寺と云寺
百石あり後奈良院勅額石に銘

服子氏諱を元武田信玄中村一氏
信牌と云居所中才一の風流也

寺流の得也 隣家は天法寺と云
末寺あり名をえの西銘あり

後乃表門を云長谷寺あり
田の中は室を院と云寺の百石

浄土大寺あり 宗派院教主寺
殿ヨ大室あり

安部川 修教寺を屋

餅の名物也 安部川餅は八町あり

安部川 安部大御也 後の田内町と

草部川と居名のもよ舟と云
み似たりとあり 是より田内町と

より安部川の中は本枯の表あり内は
八徳定あり

新古今恋の分 定家々

けしむいぬらうりか人り林のうま
家集 同

本がしり表に指し物あり
分花 公雄

表の門の前はふかり寺と瑞祥山

建徳寺菩提樹院と云ふ言ふ事
 从石八十石寺舎正一形有か堂六行
 基七作の内十の規もて外堂行
 あり天武天皇白鳳十三年通
 律昨宗奉也山如う海山と云れ
 律多也 是も亦於門の少と推
 尾の坊善寺とて今川氏親の善
 花前山新ホカ。入口山より奉七作の
 内数善堂あり。是も門と二里余と
 とも之を係とて安於茶室も有
 じ事。此の寺とて権尾同流曹洞宗
 わりか堂六の奉七作の方一高規も
 也。此は又楠古木の所りれ事と云ふ

わり古へ里人いふ事と仰りんて谷と
 わりりふ血あり心霊木中くんとて
 杉木の基并いふ事と色う好む事
 中りもいひも切也以て規も七作と
 刻之を多と云ふ事此は楠八と株
 ありが一本あり

安於川は益山石多
 川を流りてたは用宗の所いん事
 以下石於度中をとも莫れ流也
 以て八甲列を三浦兵部向井信繁
 天正七年乙列を好居
 南八日女坂つらやいふ事と規も七作
 規も同規也。由同虚空堂也

石川流り太の館山八天窟山法興寺
 といふ曹洞宗寺は二十石あり坂八町上れ
 る方丈なるは基七体の日千の観音
 あり大坂陣の最所相市正徳の法比
 云方より下り一町の岩場也
 手紙村 坂下川のさき也

音八坂をがめて松母まくと知あか
 らぬの虎を川川の急流を日守の
 中より物知々の侍甘ふ湯茶といは
 志の流れて今も長き歴史を梅
 の木かきと村家と流の川に小橋
 義和対いばやも流せり

鴨の長めも徳会よりとて大坂の宿
 とあせむかよをさかりて名は
 わるごとく甲斐の白家と云
 折一々の命あきとてりかあれを
 いきたる人の志はあきとてりか
 へ建武より源氏負ひたまで直
 進と進て古き徳会より進入
 入夜 ばか先かた入バわ那の業作
 といふ南の山より中列のなま
 亭といふ富士山をよる安
 並木のりよとをる諸人山く
 あり

○ 凡子より所経茶あり

元子歌 品物下 二里九町

鞠子又麻利子丸十

神名帳 後河王後河丸子の神

社あり東郷 文治二年一月子紙

年石又い色と治小年を信て云治合

所居色と弘家又建立云之とP正

札物つ許ちて散位親依又作て門屋の

少治人ホ又治りて弘合を取立よこ

下知せよとなり い色又折を能とこ

么得とあり後弟良院柳柳小とさ

よりこ川い おはのか橋 い橋よりとく

六町余のむと宗屋寺とて連分作

宗長のありいおよて宗孫六王辰

二月廿日八十歳にて死り宗長自身

の懐紙大一席切入八好合并禁裏

らり宗の座敷又下されり守をる

親をありる庭泉水と宗長の作也

石塔之灯籠七苔じてありる東の

山二つのろろりかる月とるて月

峯と右射らしたり い寺とおり

おれと和采谷の親をあり又二町

程ゆし龍昌院とえ得守ありか子

親を也い庭の山と大柱山と云を記

とるとやて程百丈とちく程と立た

るがいとり

とととりく 二町宗屋 赤目川

たのしき岩波あり甲列うらまを玉衣
とせたりや

矢の法

宇都の家 ○ 系屋の家、有坂上り口

宇都の家 或宇津古書傳名跡

務河を有慶部内屋傳訓宇都乃

とけり いわゆる十世子と書傳名

母敬いと書傳名と書傳名七十宛

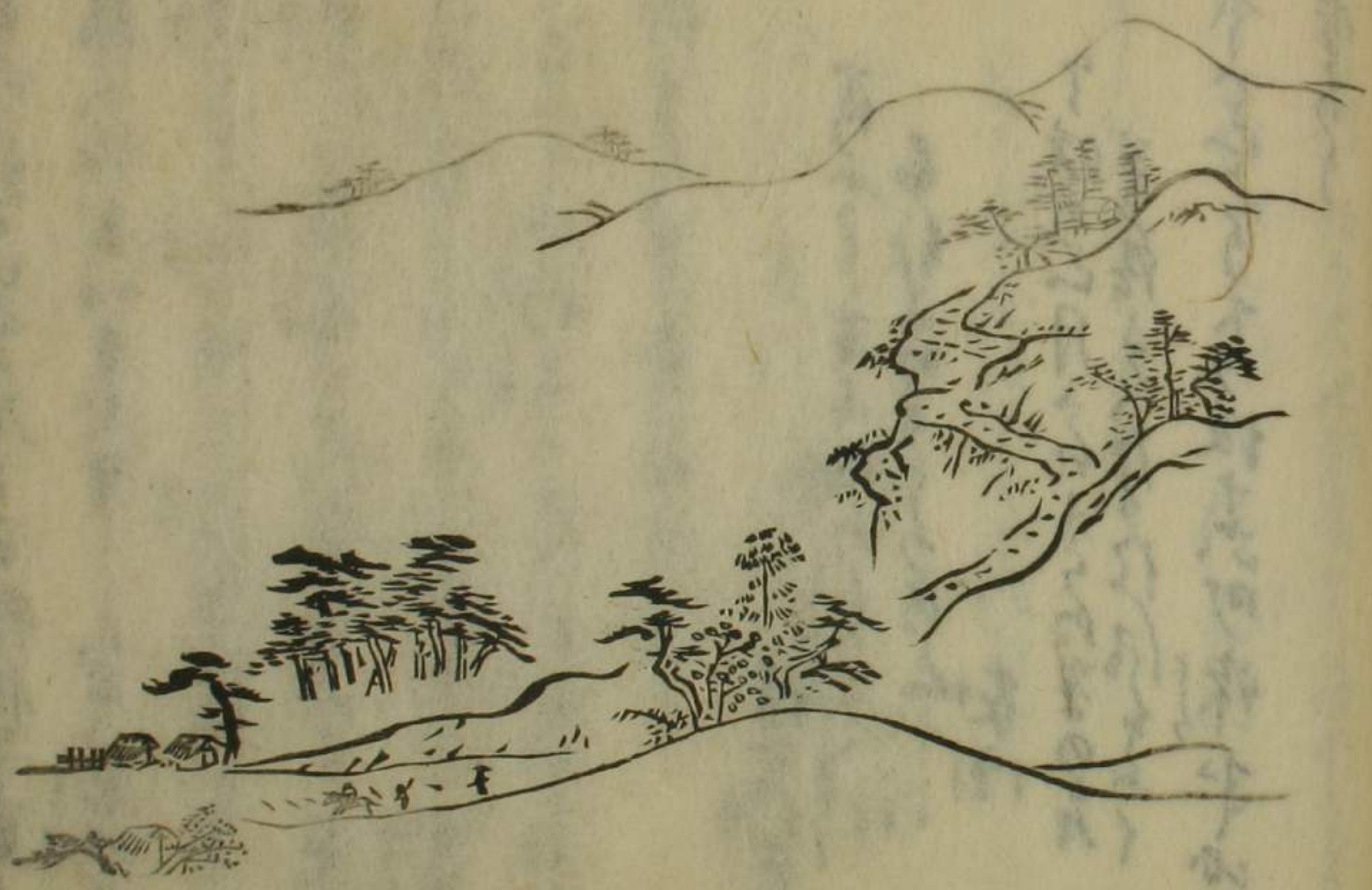
有て多かき一 いま系屋とて家と

つ生うらたけの山石の経路あり昔の

取留考細なる今のたけりし人等

たかへ山中て書傳いとけ今ハ推文の

初通不今七書相とてまらる



東名巻三

二

長門が北よひ山の頂上一の標柱とて建
 該人海分つきむ筆一とて東抄
 従てその山の北より七じり今ハ
 巡礼の居書しは、いれども一長明
 け新本とて、いしくとく、
 いふ事、修りよる、
 けよりん、いしく、

傷
 家
 今津の正月、
 差、
 今ハ、
 昔あり

中倉口村 坂も又、地盤高き、
 なるる村 又、
 大い、
 ○ 小坂あり

是初秋 坂、一里、
 是初川 新町、
 昔桐

横打 入口、
 新比奈川 橋所の、
 和の橋、
 た、

た、
 和の橋、
 た、

落れ心もろかり

○ 八幡橋 二所 終末あり

八幡橋 古の方より八幡のありし社ハ
後列の是れ氏約比宗氏の氏祚にて
今もお家の子孫經包を以て必宗
詣りしり

冠橋

水も星 三葉屋

古の方鏡が測あり

平河川田中の水裏石之並松ありハ
城ハ信玄後列を付れて是れ法の感
馬場是れ法也又鏡法は台に籠あり今
丸馬ありと云ふ物ハ以下と法之也
と云ふ事田氏守りて天三十年依田右

河川位甚多後、所ある家走干甲列
言力有たあり是れ古之より後中村氏
領之を長六十年酒井伯後子忠利
同十二年常懐外村定郷領之を永二
年より忠長公領之次同八年今松平
大膳元忠重と賜り高松王より及ぶ

菱枝頭

河田 二里八町

田中城遊子口町中たり言あり
衛門川 歩後存板古足川南ハ
大堰川の下の新堰品の後より大
堰備水の附ハ河原(但)之武田勝頼
甲列より折おし不具 大神君討

陣わり信康の後殿を争つた事

源隆子よ久の娘と

かうしてはうらやまのつとめ

○ 志た村入口

志た村の茶屋

大木の橋

南にゆるい きのうの

水の上 是を田中殿

六地蔵村 地蔵堂を

吉清 津久 茶屋

傳右沙は後河を是に改称し世止和判

西刀は不毛を津久の津殿とておこし米

と其は津久を是のめが新村とす

いり火よおこしおとらふ

たふさなりし岩つん中おうりや村より八

十六の河村は中家

二軒屋 三軒屋

屋川法橋 せんく橋を橋の北橋

○ 細清

道悦村 とも山橋

おかり屋村

鳥田畝 金谷の寺屋

町は助宗と云搬治あり

○ 札の辻あり いかん古へ茶屋

云長崎の海防記は茶屋の市と云

友成の市と名を冠して花の咲くやうなり

新治の市は八幡の御堂なり

新治の西と清田河系と云今八幡田

とて大井川の水とせよ入るる清田

か開あり 新治の御堂と清田の御堂

小室の御堂

向清 中清と云

三月屋 川越屋なり

大堰川 小川流るる清田御堂

清田を流るる境川海舟一の大川也

南風は水より西風は水より水白

く濁 元徳年中新治系係基因

と流るる川とて新治系係と懐かしの感

概あり 十六夜流るる河川の分

その御堂なり 一とて大井川

いく清めたるを新しんて

八幡屋 金谷入口川越屋なり

谷塚の奥の中の家なり 中より清

経あり信玄の御堂の傍也

修長八丈井川下を望み余早う清

と望む中が先の御堂なり

金谷流 西坂に 一里は町

西坂と松山の坂あり

○町ニテ 長明が菊門を流るる

一村あり新場と云ふありは河の事なり
 おはより坂の上は後防の系は流石なり
 是は八幡寺天正元年癸酉に傷あり
 法号は院法を典麻信親系に傳へ
 築室翌下徳昌清小泉集人忠孝
 と入室同二年乙亥三列を改築松平
 周防より出陣と入室はつり所の裏より
 よう流防の系は遠きあり也

物の系 権現文 後防の系と改め
 物井系としたりたを周防と志し
 更古より詳也 本よりと云ふ

菊川 坂 上下十六町

菊川 系 彦 焼更廣石系 矢根

流も今よりあり東西より流あり 此川
 との谷おの菊川多し菊が倒し有り
 昔ハ以下に秋合あり 杉物と流は
 此系は休む流は休む木も流は流は此
 抄割と秋一和を流は一系之の
 此系中約三夜系系仍の院室と書
 たり也より言系下り此系を流
 たり付

昔南陽縣菊水 汲下流而延齡
 今東海道菊川 宿西岸而終命
 と名は相は書付一更東邊及之系入
 記は詳也去也た年記は光親と書
 一八保也 長治に治三年の秋は宿

到至家乃が回柱と云ふに
ついで柱と云ふ詩に焼失と云ふ

長め

ふりしと云ふれかわされと水と云ふ
あつと云ふと云ふと云ふの語人

為家

神三月もさうらふる菊川乃
星と云ふれを秋と云ふ

作歌の中と云ふ故也と云ふといふ

中山系屋○十六所延 右の方

館の改わり是れ日坂と云ふ故也

遠江玉作野取之と云ふと云ふと云ふ

お通也古今集也

かいつと云ふと云ふと云ふと云ふ
よこかりと云ふと云ふと云ふ

是れお通也と云ふと云ふと云ふ

ふりしと云ふと云ふと云ふと云ふ

りしと云ふと云ふと云ふと云ふ

四郎と云ふと云ふと云ふと云ふ

阿まともと云ふと云ふと云ふと云ふ

兵よと云ふと云ふと云ふと云ふ

甲斐風と云ふと云ふと云ふと云ふ

明也 建武の初と云ふと云ふと云ふ

友よと云ふと云ふと云ふと云ふ

云解者寺と云ふ曹洞宗の寺乃二月

初午と云ふと云ふと云ふと云ふ

鐘と撞と云ふと云ふと云ふと云ふ

まとも現世と云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふ持人本れと云ふ住寺粥と云ふと云ふ

寺法入罪と仰る女とて殿井
 埋し今も彼古井の枝と折れ
 又投入して撞たも日月の
 事也 此所の石方西行が
 修て又少一の分也 郷老
 て云信通西坂は母あり金
 振て降月あり一か母切ら
 ちく腹の内より啼りると
 又へ哀の母が後うらみ
 十六歳より母の事と語り
 ありし後見お法て法修す

昔と申ひあつた田の
 とて田と耕し軍を九月
 起す命ありうらみ小
 ともをりつと家ま
 りをいふらつと法修の
 家をいふと打てて母と
 自らりとも母の事と
 其後より力と活て既と
 と顔しぬを後修の事と
 て父母の法世と申す
 後修松 中ふ十所
 かんくけつりれ今ハ

小夜新田 名久保

ふよのまの社 今ハ事任の社ことまじ、
玉一の文うまいちのこ、大己貴命おほみかみと余あまの記
さやの中心の乃の口のくち、あまのまのまのま
社何りいかに、いかにいかに

又また、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

ね換

神かみ、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

日坂 掛川 一里九町

西坂にし、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

いかにいかに

日坂の首口

日坂

文村 峯田ハ情名仕こたけ、いかにいかに、いかにいかに

左ニ銀杏樹あり 右ニよちが田あり

町まち、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

悪あく、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

植うゑ、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

男おとこ、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに、いかにいかに

石と云り。折原内林基と因んで
居る基盤と云。折原の縣と雄雄と
折原と折原二つの縣と云。其を
折原と折原の縣と云。今も基石が
折原と折原の縣と云。今も基石が
折原と折原の縣と云。今も基石が
折原と折原の縣と云。今も基石が

まがり屋の橋 三折橋
塩井川 ○ 是が掛川領

塩井川と云。大なり。本の下洞の川
あり。今も御指川あり

わたり川 佐宿村 是と塩井川の川

大仏寺 山にあり。是屋中の中

中橋 山橋 是と折原の川

折原村 是と折原の川

成竹村 馬喰町 是と折原の川

○ 是と折原の川

懸門跡 袋井、二里十六町

河水城と云。少掛門と云

考相

これと云。折原の川と云。今も
折原の川と云。今も折原の川と云。
今も折原の川と云。今も折原の川と云。
今も折原の川と云。今も折原の川と云。

城 右の字也 高城、今川、折原の川

折原の川と云。今も折原の川と云。

約以余使中書守之民志也將而之
永保十二ちうりく浮屠後在川日向守之始之天
正十八年寅山内對馬守一守之長六
年正松平後守定保同十四年嘉德
卯於時於此也元和三三年同家臣
安藤常力直次始之同之友松平越中守
定保寛永二年後河大納言家臣物
全無後守定保同十年壬子山内大納
幸成史分及為國城至

ふちの上 二ふちで洲川在之昔ハ弘治合多
物の上治もよふ市又市一軒屋入系
小々春時以可しん積飯と作る云々市以
尾池村 入口は橋あり山橋あり林葉

山(行遊り)十里也秋葉寺ハ曹洞宗
本寺観音也鎮守と云二人坊と云大
天狗也火柱靈験有りて船を昌々
復多村

江田村

細田村 在の方大山の下の林高天林
城跡也小笠原守八郎守り一取小笠原
山と云其山の頂より人塚あり

砂川村 少先ニ山を川橋十二万
御所右と方坂の上は新長光寺也

暖川 弟を是と掛川依が口橋を
向と小後川と云長め記と掛川の西
不まて子川有る所と云たてし西の川

と背川と云東か川と腰川と云

と云て

後川と背川のより尾流人
とむ里へのころとてし

橋のたよ流る社ありたよとて開け

あり六月系流あり

ふくろ 名門と云多屋 花よ

ぬよふ 家二坊と云つべの門

たのふは敷屋寺と云日蓮の父貫名

宣忠の寺あり

水名村 ○ 多屋 町と云れよと増

りよいふよとてな屋と云て意

たのふ夜の門よ久野城あり代よ

野氏と云く寛永十七年と云條あり

守氏宣忠と云 一の方七ツ敷あり

東のり屋 あり屋

代家井入りよあまの橋あり

代家井流 見せと一里あり

郷侯 首は和回方皆田とて流と繞り

代家のとて田の中よ井と破下の石とす

町と云りよ橋あり長十三より 大木里

の久野村山下 曹洞宗 駿遠二のこ

くよ慈縁可懸斎と云寺あり

川井村 代家井と一連也た代家あり

本系村 ○ 入口あり 大よ方よ熊野

権現山門社と社あり十石余あり本系現

とよ原老彦禰へ水一瀉さすの門
握生がた大地と如敵とすうは地と
入給ふ也今も毎年饗食とす茶
類とあり

見付詠 漢松 四里七町 昔ハ三里

大神君と信玄と一言坂下で戦あり
ぬ衣務後殿へは水と焼たるとあり
象方東へ下り人び強ふ事あり初に富
ひとつた少くも人あり

の伝

竹う来て身ん村の屋とすなり
いと旅秘をこそおれり

○ 東坂の上より 十五坂より

町中よ中川橋十二町 熱社神の社
おひか七川橋十二町

西坂 けらと坂とよかおひあり
湯松 系屋まんぢりあり

たハ懐愛社屋三百石行方 厨六堂

あり 町をつきたの方又今の浦と云
海地あり長崎記を以て所今の浦と

云ふは夏も暑うて三四町なるやどふ
白糸の小船又掉さうて浦とのあり

まん進ん境海の中より例儀を
く備へて松前とよむひつげん海松を
よね似たり

信乃着て松の嵐七いまの浦と
所のの星れ居候とてま



中泉 大まき山町まきやまの曲まがり泉いづみよ

ふわりやうふと云い河館かかんの江えあり

大津おほつ系けいも自みづか極ごく山やま樹あか木きさきさき急いそ

原はらふまま也や在あるる年ねん新あらた鷹たかよよおおははり

しとかりしとかり横須賀よこすか三さん里り田た介け介けとと三さん里り

横須賀よこすか城じょう天てん正せい二年にねん乃の高たか天てん正せい押おし

初はつテテ籠かごまま大おほ須す賀かのの山やま居いてて海うみへ

子こ忠ちゆう政せい居いてて天てん正せい十八じゅうはち年ねん波なみ瀬せたた島しま居い

常じょう頼らい有ゆう馬ま雲うん高たか島しま氏うぢ長なが六む年ねん

松まつ平へい知ち村むら者もの長なが政せい夫つま乃の高たか島しま及およ

大おほ泉いづみ院いん所ところ乃の小こ坂さか乃の高たか島しまあり

下した万まん徳とく村むら たたかかけけ塚づか乃のあり

○ 文ぶんのの一いつ又また 惣そう勢せい山さん又またけ

東とう各かく卷まき三さん

七しち

長湫 たに八橋の祠あり

長湫 泉屋有 是今地の上と云

右東川と云も天流の内也

こやすの東川而右にこやす

池田宿 船場と三町と云右の方

境と下り二町ゆを寺あり庭も真

と築石塔二つ有左は泉石かえ控屋

石塔右は石塔なり石も母の石塔なり

左の塔は控屋石塔の表と云一の石塔

と云有り塔の表は湯屋の控一様有り

右の本は風守也今のはそと本あり中

は寺と長を泉と云一は石塔四方七

石塔の石と湯屋といは石塔の傍に

泉屋あり幸と云れて久愛都より後

と信くゆりぬを衡海及下の町あり

成り一奉海に記す有り 軒あり

上流ももま右一軒入流も掛川

ま右一天然の石を流して後と池田宿

ま右と云り右を右川と云り有り

川の形あり今ハ東は右と云り有り

川流は右を右あり

天然の川の源は信濃の信濃の湖水

流也信濃の社内は清水流あり井あり

其井の泉ありと云と泉を其井の

天然の水毎日六井中へ流ると云

其井水信濃の湖へ流る大流あり

妻よ天流とて天竺とて出づる
長内化と天中川とありあり

うさぎもさやうさやうさやうさ
河生つこさうさの中川の水

東の津と大天竺西と小天竺といふ
舟渡り也大舟も一舟もなれ小舟の

遠き舟の舟より船も糸 軒家入港
の津川は津渡橋と梅りよま先廻る

のどくろ馬籠は津の橋先くみりん
小津津時風うら河辺もなり安皮と

教へ舟の舟も舟人懼れ列と舟
故も橋金く人悪く津りともん

連氏の記も舟自川と津り一舟も
舟舟化も舟世の舟舟舟舟

富岡 一又 是ハ舟の舟舟舟舟

町屋 系江舟の舟舟舟舟舟舟

舟り 舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟 舟舟舟舟舟舟舟舟

○ 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

うら十一里也

果昨新田 ありま葉作きといひあり
香居松とあり方 松をかたき多居
かろよ小橋あり 大し一町

永田 右の字神楽の神主蒲
み布とん 龍形の子孫也社は二百
蒲田より系伝い色十六所のり蒲田
松松 入口小橋あり 大神町系伝

○ 松系あり
まじめ橋 二十字 溪松入口は松系
溪の中とあり

東路城土傳卷第三

東路城土傳卷第三

溪松頭 舞坂下 二里半十二町

舊ハ引馬と云溪松と云系ハ下分十町
余東は松林あり溪松と云普慶院
教卿富士見のたれ下向の付け松のト
小入酒喜あり流ひ溪松のまはざんざん
祖々今ざんざんの松と云 大神系引馬
と攻め多ひく溪松と改め前の溪松と云
溪松といひが全文改て腔口の松と云
城在の方を立高城ハ今川氏との附殿尾
を系伝とありて妻女居く 大神君
をを喰りりりり城不後永禄十一年

十二月廿日攻を多し城を討死女十八
 人我丸々城落酒并た島尉居之元
 無二子方 沖居城とかりく後城車
 三之元居り天正十八年城居居
 台晴因信流す右氏寄居居年松平
 たる元右親其方為城自三度上
 台徳院殿も城子生れたま上
 城の殿五社大の神宇須坊の神有
 傳多町裏之五社社居二百名神自
 氏却須坊社居二百名神自松浦
 宮内 六社方少十町程ゆし屋
 かけ今八谷も少く流し 右河町
 と十町五町程ゆて水入口のりよ有

ゆりありけは小難新ありけは流
 多のの石と付たり 傳居沙を江
 玉發智那は流松あり今の野口の
 多り言は傳し是ありりまを傳
 今の流松也

領家村 ○ 入口あり
 岩林 系居あり 寫所堂あり
 増樂 高塚 太は須坊の神社
 ○ 條系 系居あり 入口は流松依
 此取石を方三並并ありあり一町の
 此取發志都品と云は之は方有り
 二人は傳を止めぬは下をわし伝
 一あり 條系新田

俵井村

万能寺 三郎村あり

○ 柴坂入口あり

いり砂まゝかゝるぬまあり

柴坂頭

新居、海と一里
なほ二町

柴坂 柴坂をどと名づけたるは、
て柴坂より白砂をたのごとしとあり

東海に於て流の所、松本の頭より

せり、松狩一人、小糸、実時、柴坂

の松原、宿と、奉時、云、実時、八、幕府、進

侍の長、之、所、松、松、と、難、久、に、つ、と、を

て、松、松、ま、ら、と、つ、り、は、時、今、切、い、ま、後

地、を、松、松、松、松、あり、と、い、ふ

の、松、松、松、松、あり、と、い、ふ

今、切、渡、首、の、松、地、あり、渡、渡、の、院、松、松

八年六月十日、大地震、之、と、真、松、松、貝

ぬ、松、松、松、松、あり、と、い、ふ

二百十三年、松、松、松、松、あり、と、い、ふ

松、松、松、松、あり、と、い、ふ

の、松、松、松、松、あり、と、い、ふ

松、松、松、松、あり、と、い、ふ

松、松、松、松、あり、と、い、ふ

松、松、松、松、あり、と、い、ふ

松、松、松、松、あり、と、い、ふ

松、松、松、松、あり、と、い、ふ

松、松、松、松、あり、と、い、ふ

松、松、松、松、あり、と、い、ふ

いふと津石に足ゆは津山の奥に足ゆ
ととくうの津石あり

新居

白浪野一里古町
九八二里十町

是并大总堰大書然大今切の浪新
堰正字也たハ海鏡也新書前を下リ
母女危并孫抱カ是公等と改流文用
昔ハ名ゆをそんら勤之後二人あり
勤之と力同と云くを身在ゆに止て
在田の減りゆく勤之と云く也去未慮
津石の今の所書所歌舎在津郷
代り

○町の目 昔ハ橋が松並木二三町

もせりて歌入今ハ舟着と云書
中書一より一在橋を一橋上河橋
か一橋より也 浪石の橋の終
ため方浪松林のそよハ舟着と云
の石今より 大津の八橋の
たのふ也も橋のふと云所と云

右今

西村の作

高脚山りてくそまてやと云
ととまの橋と月とと云

三井昌

塩三の橋よりゆふ路一人也
とまの橋と名を初り

堀川百々

水鏡

今ハ三の橋をくくらと云
浪石と云くそまの橋の

家集

三井昌

その上の溪名の橋をわけたり
かけつ所よりこぎりけん
かく橋たれど火架あて橋紐なり

言志山 言作たるなりと書き

を列三列の坑かりい山中と申せ

と云小糸蒸付柳と柱玉なりと世

人召公の井常は比とと長ぬきり

たより右の方之芝井と申すゆゑの

多志より申すな坂城よりい

を川宮な井糸二村と申して溪松

天然のりよ申す古人伝言あり

溪名の橋の雪月と傳ふるまは時

なる麻とあり

橋を 小瀬ありのり 河津川の南の川

流る溪名の橋を御らの流は掛る

橋也一説は溪名の橋ハ海乃より右方

橋中の宿より小三里余よりりな坂

の所なる湖水より水の心際之を志山の

小瀬なる湖水、南西へ流るぬより

おひふ方の溪名ハ城の居あて橋なりハ

其橋畔の村軍と申すれども其の伝より

べし橋をかりん右に海と申すは

て其のまは坂の方ニケ目村とあり

まは 摩訶那寺大福寺と云より溪

右洲より申すケ目と云は溪名と昔云

うた 池ありとつら今切流をたの入

海ありんニケ目の方より入海流なり

東合

昔は^いま^ま村^の宿^一所^に經^入洛^の所^に
此^の村^に宿^して^は氏^の年^内の^所に^是れ^を
と^りて^名を^とり^て賦^す

右此^の田^は大^に産^す大^に

〇^〇〇^〇白^須野^村也^右行^る六^里

〇^〇〇^〇白^須野^村也^右

〇^〇〇^〇白^須野^村也^右

潮^見坂^に地^差堂^{あり}餘^り上^り遠^く
中^の宿^に宿^して^は氏^の年^内の^所に^是れ^を

羅山子

波浪^一天^俱一^色 望^中無^鳴

又無^山と^賦す

白^須野^村 二^里一^里十七^町

元^禄末^の地^震津^波波^の浪^初ハ^潮見^坂

坂^の下^りに^今ハ^十四^町七^上一^町

様^が多^く場^と宿^を今^ハ白^須加^一條^と

か^し餅^意也^弓少^切て^うた^上坂

と^りて^小坂^のり

備^指 三^人計^の極^指之^三河^を白^須坂

多^りて^二三^町を^一段^と段^と段^とり^り

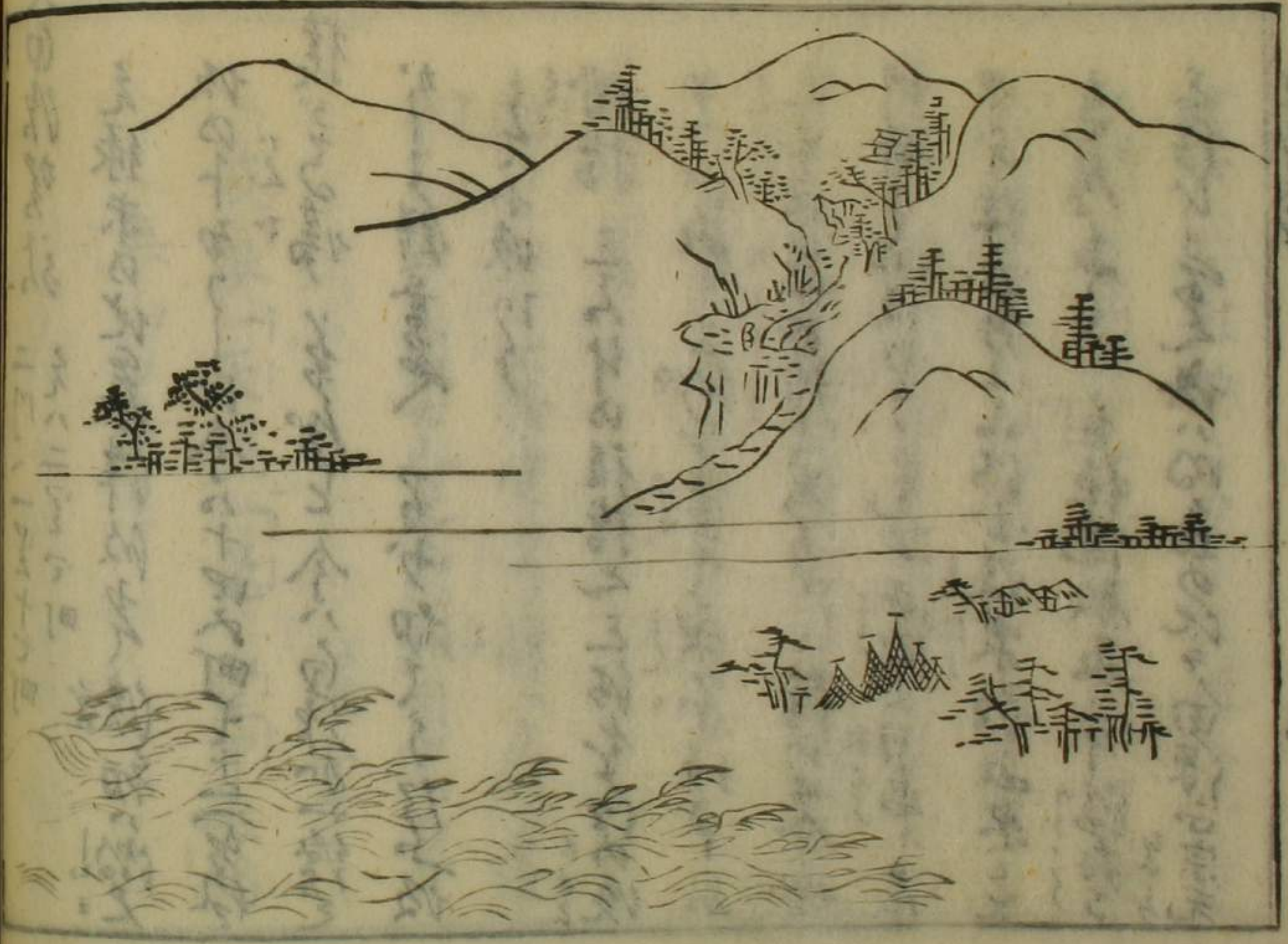
之^をの^備指^とり^り 極^の先^の場

川^坂と^小坂^のり^是今^ハ遠^く又^一段^と

中^の宿^に宿^して^は氏^の年^内の^所に^是れ^を

名^を層^と多^く 台^徳院^殿毎^年終^る所

志^を行^ふ是^れハ^佛の^意也^此田^原正^宗光



從^{より}來^く二^に代^{だい}居^い之^の中^{ちゆう}比^ひ今^{いま}川^{がわ}持^{もち}方^{かた}と^も二^に代^{だい}
 穿^{うら}派^はし^て又^{また}長^{なが}六^む年^{ねん}之^の由^{よし}古^{ふる}作^{つく}り^し也^{なり}
 流^{なが}り^し二^に代^{だい}居^い之^の今^{いま}三^{さん}宅^{たく}氏^しと^も及^{およ}ぶ
 一^{いち}里^り山^{さん}村^{むら}並^{なら}び^にた^け池^{いけ}塚^{づか}と^も

○ 飯^い方^{かた}松^{まつ}止^ど

節^{ふし}遠^{とほ}橋^{はし} 二^に川^{がわ}合^あ小^こ橋^{はし} 右^{みぎ}の方^{かた} 立^た石^{いし}止^ど
 足^{あし}中^{ちゆう}の^の止^ど八^{はち}帖^{てい}安^{あん}の^の鏡^{かがみ}不^ふわ^り

一^{いち}川^{がわ}流^{なが}る 春^{はる}田^た一^{いち}里^り亦^{また}二^に町^{ちゆう}

入^い口^{くち}町^{ちゆう}又^{また}○ あり

昔^{むかし}八^{はち}大^{だい}宏^{こう} 唐^{から}派^はと^も秋^{あき}舎^{しゃ}二^に所^{ところ}ありし^{なり}也^{なり}
 近^{ちか}年^{ねん}一^{いち}所^{ところ}を^をて^て二^に川^{がわ}と^も今^{いま}七^{しち}所^{ところ}に^に
 分^わと^と大^{だい}宏^{こう}と^もなり 小^こ宏^{こう}右^{みぎ}の方^{かた}と^も

あり 大塚の方ふ也 大折坂の二
三町前より石碁^{せき}あり 今いじれの系
屋の古より入るは山に石を切
ぬる中より岩を挿し 岩を空と称
^{いさ} 大塚山あり

大折坂 古より ありとふを といふまゝ

大塚山あり

二町前屋 いじれの口

いじれ 系屋あり

いじれ 橋場あり 右より石を

とゆふを建てたる松と申す 神倉様

より二町前八石部石巻神社と云ふいふ

池は綱草あり 二連本と云ふあり

わけあり 吉田へ石屋あり 石巻

川ありと

吉田の入口あり

吉田跡 津池、二里半町

町の門より坂あり 田原へ二里

城古よりありは城の牧場小白根と

戦死の後傳はる守り 清康公

の討傳はる守り人討死す 高島家

属す 清康公薨後今川が能く

小原記家居る永禄六年 大神君

所領と成て沼井左衛門尉忠次居る子

家次代々大正八年池田と云ふ新設

東の事

三代り 延長六年より松平吉房に
家清^{ハク}賜て^タ為^ス城主^ニ及^シ
此城は野牛^ノ門^ト云^フ長^ノ條^ノ方^ニ進^ム子^ノ
門^ヲ云^フ

大橋^ニ百^ノ石^ノ町^ト云^フ是^レ也^ハ源^ノ氏^ノ
伝^レ引^ルより^テ若^ク長^ノ條^ノ根^ノ乃^レ河^ノ川^ノより^テ
是^レ也^ハ也^ハ 是^レ乃^レ伊^ノ勢^ノ白^ノ子^ノ一^ノ船^ノ也^ハ
あり 比^レ川^ノ始^メハ^シ是^レ川^ノと^テ云^フた^リ云^フは^シ
より小^ノ三^ノ室^ノ一本^ノ坂^ノ越^スの^ル乃^レ是^レ川^ノの^ル
あり^ニ云^フより^テ流^ルを^レ云^フあり

長^ノ室^ノ内^ノ所

若^ク人^ノ力^ヲ矢^ノ刻^ニ云^フは^シい^ハり^ト云^フは^シ
乃^レの^ル海^ノ色^ト小^ノ松^ノ原^ノ記^スあり

ワ^シ云^フは^シ云^フと^テ云^フあり

○ 橋^ノ造^ルあり 下^ノ地

四^ノツ^ノ谷 系^ノや^リ 先^ニ云^フ橋^ノ小^ノ橋^ノあり

下^ノ河^ノ沖 元^ノ下^ノ井^ノ也^ハ河^ノ沖^ノ記^スは^シ云^フは^シ

小^ノ坂^ノ井^ノ村 右^ノ方^ニハ^シ橋^ノあり^ト社^ノ記^スあり

酒^ノ井^ノ氏^ノの^ル記^スハ^シ一^ノ所^ノ也

湯^ノ瓶^ノ町 小^ノ坂^ノ井^ノの^ル日^ノ系^ノや^リ云^フは^シ

石^ノ物^ノ山^ノ名^ノ云^フ

○ 皮^ノ多^ノ村^ノ入^ノ口

皮^ノ多^ノ村 此^レ後^ニ平^ノ南^ノ村^ト云^フは^シ每^レ身^ノ骨

系^ノ江^ノ戸^ノ一^ノか^リ万^ノ歳^ノの^ル住^ル也

橋^ノ町 此^レ入^ノ口^ノを^レ名^ノ田^ノ云^フハ^シ八^ノ坂^ノ橋

河^ノ沖^ノ隈

東^ノ各^ノ卷^ノ

玉府 三河府中 也 倭名抄 三河玉府
寶飯部あり 續日本紀 文武天皇
大上天皇 持統 幸三河 武と 仰り 玉府
の事 成り 大西寺 浄土の方

○ 玉府 古口 一里塚の北 古口の方
お坂越の 渡松の 家々あり 古口 又 並松
又 山家 三三 十町 此 村 又 三ツの 坂
路 あり 古坂と 鳳来寺と 牛窪と
別る 也 是より 鳳来寺 三三 里 あり
又 寺 あり 家 あり 古口 あり 池 あり
宿 あり 古口

たけま村 河津川 入口 之 傍 あり

河津 赤坂 十六町
えん井 と あり

松 毎 年 一 尺 竹 の 産 と あり
ふよ 大松 二株 あり 古坂 の 傍 也 永祿
の 比 又 井 印 記 在 仰 と 郷 侯 曰 かり
永祿 の 比 八 井 不 伯 父 祿 年 中
八 井 郷 と 記 事 悉 揚 七 八 井 外 純
と 稱 とい 宿 あり 古口 一里塚 中 又
井 村 あり 屋敷 の 傍 也 古坂 八上 八井 也
古口 八井 八井 八井 八井 八井 八井
古口 八井 八井 八井 八井 八井 八井
是 世 七 松 年 と あり 古口 の 事 一ツ 也

赤坂 古口 古川 二里 九町

於此多一 高野河内大富饒の地
 長崎元大江定基の於此の事仍
 て道世せりとなり定基公は儒者也
 公は信と次て名と寂照と改め入室
 て吳玉と名を改めり因て人れ
 古より此の遊女多かりしと云ふ
 山崎氏も化人赤坂瓶とは号せられた
 了街の四元より赤坂の湯治あり
 昔は多く湯治治とせり一在之
 事乃移りて小栗の寺あり

長浜 入口は八王寺橋あり

○ 河内川の改の茶あり 左の方の
 あり今川方が小栗屋の寺橋宗あり

一と永祿七年三月より改三月廿五日
 磯橋宗八後名の中流弘討ねけりハ
 其孫長法家とて七松平の一と云ふが
 子孫嫡家ハ後々皆藤原也

七と島 弟や 寺の茶 弟也

宝蔵寺 淨土宗百五十名河内朱
 大徳宗の幼祖の時中より此の地一法
 札をとりし門家は自ら植はり松
 古本一様あり

以不末三河西三河の境ありと云

茶の本原 古の田あり

桐の本 ○ 村中

中茶 是より坂あり

山中 東小川 鳥居社あり

長崎記は香船の宿と記して定路と

知て赤坂より行くと行くと下の事

杉原と上落路は定路の山中に石

一壁日橋中の歌は宿と行り

い麻の綱袋早縄と賣

後撰集より

云々の記しを并よらん所定路と

折知り人たしむるやう

水香の浮くふのまじりて

兼本入は小坂川に橋あり

兼本村 八幡定名居あり社あり

石の橋石

菖川歌 是傍一里半七町

宿とつらまよ

かんじま村 是の郷の心

右に船とん松家

堺松坂小坂より 是の郷の心

遊家寺川 かねあり

名回郷 左右回郷大土 かね小坂あり

名回川 高橋 大橋

大平川 橋四十三石 旧八男川と云今

備よ支川と云 右の方いか川と云

藪あり是の境と云 大津玉園東に

入虫の後初と上落の時に休息所館の

終之松の大本あり 大津玉川あり

東谷巻

送さき一途をて今も枝下へ向か
 川の子氣増松坂よりたはし路有足
 卯存良西尾へは乃之 右良河乃
 一里才又小豆坂を天文十一年八月今
 川家元と織田信秀と合謀松坂を
 三宮町より家元殿軍と度良松一妻
 終ハ竹比系小三弟也河内九七を終と云
 津田孫三弟信光織田造河内信房
 小方河三弟匡範を河内助と為す教作
 隼人勝通信三孫女勝を中將又系
 忠則也

大平村 弟屋有 河口かけの郷と云
 此不重並芝多く生一奉也

○ かけ

かけ下の筋遠橋 是も長尾の
 かけ村 弟屋有 長尾入口

△ 長尾筋

池原野へ三里才十一町才一
 右ハ二里二町

敵 左の方ありけし永和の比松平
 太弟良弟泰親筑末之河内和泉吉伝
 先信光之男松平純信光室同嫡
 弾正左衛門昌兵衛之 清康云一親身
 清康云居住しはは格多く後松平内
 膳信定押解す天文十一年 廣忠公
 海城より薨去後天文十八年今川
 左近衛一永祿三年討死の時六月三日

大神君尚幼く入世給ひ元龜二年
二郡二府信兼云は又居給ひ由里善の
後を及作爲す^{子孫}其初所^{子孫}授正太保君
世天三十八年分原治政事務亂田中在
政事長六年分御政を後で^{子孫}兼重
備々分爲城を^{子孫}守
爲城より三宮御小松平つわり
町の表より甲山守より所代との御氏
神八幡文あり
西尾城より二里と是は吉良の所分
ありしが永祿四年沼井雅重正親
居を^{子孫}末分今分ち丹家居を
信濃川 橋之十宮より町おひまわり是

淨五利の牛を名とまらしたる川とつり
大橋の下の町を八町と云
矢別橋二百八分 石中才一太橋
矢別或ハ矢橋 矢作とも書り
信吉田本武爲東夷征伐の時賊を
山中より^{子孫}奪ひ取て多く矢を作
て給ひしより居を^{子孫}守 建武の初より
矢別を^{子孫}守 矢作を^{子孫}守 矢作を^{子孫}守
比川のあまおと下の郡と治くを^{子孫}守
かきと友軍強合は是利勢と切崩し
源義氏は多し亭を^{子孫}守 源義氏は多し亭を^{子孫}守
長治城より大津を^{子孫}守 長治城より大津を^{子孫}守

橋たれ後たれ一たれ時たれ家たれ先たれ中たれ一たれ回たれはたれ橋たれはたれ他たれも
 備たれれたたれ大たれ橋たれ更たれ大たれ分たれのたれ費たれ且たれ高たれ河たれ鉄
 土たれをたれたたれ河たれ下たれのたれ要たれ害たれおたれてたれ止たれむたれ向たれ後
 舟たれ後たれ一たれ路たれもたれりたれはたれ大たれ神たれ名たれ田たれ橋たれハ
 代たれにたれ記たれ録たれしたれ裁たれ目たれがたれ中たれのたれ田たれ名たれ田たれ来たれ七
 呂たれ子たれ申たれ定たれ之たれ日たれ五たれ十たれ中たれ之たれ以たれ人たれ御たれと
 橋たれとたれ止たれくたれ注たれ是たれをたれ不たれ難たれ知たれとたれ掛たれりたれりたれ玉
 持たれのたれちたれ三たれ子たれ也たれとたれ板たれ除たれとたれ柱たれひたれ八たれよたれら
 登たれ一たれ高たれ附たれ 家たれ康たれ心たれ入たれ向たれ左たれ橋たれはたれ非たれとたれ家
 橋たれとたれ掛たれ注たれ是たれのたれ於たれかたれまたれ後たれ又たれ仕たれはたれくたれをたれ何
 おたれ子たれ半たれ掛たれりたれたたれとたれあたれん 也たれ西たれ五たれよたれこたれの
 大たれ河たれわたれるたれ石たれ子たれ三たれ河たれぶたれくたれ之たれ所たれ謂たれ矢たれ利たれ川
 大たれ平たれ川たれ右たれ高たれ川たれ也たれ大たれ平たれ川たれとたれ若たれ八たれ田たれ川たれとたれ云

男たれ川たれ八たれ男たれ村たれ之たれ廿たれ村たれ一たれ而たれ後たれ後たれのたれすたれ谷たれとたれ橋
 てたれ後たれのたれ石たれ橋たれ頭たれ大たれ河たれ村たれとたれとたれ右たれ高たれ川たれはたれ高
 とたれしたれ昔たれ村たれ後たれ信たれ守たれりたれをたれ川たれ右たれ高たれ川たれのたれ上
 のたれ村たれのたれ右たれ高たれ川たれをたれ後たれのたれ路たれのたれりたれ

○ 橋たれ若たれよたれわたれり

東たれ屋たれとたれとたれ 系たれやたれりたれ
 西たれ屋たれとたれとたれ おたれくたれらたれまたれまたれ十たれ王たれ堂たれありたれひたれ堂たれ
 湯たれ坂たれ橋たれ河たれ茶たれのたれ江たれ野たれわたれりたれたたれのたれ田たれ中たれのたれ條たれ敷たれの
 内たれはたれ名たれ作たれをたれ名たれのたれ原たれ後たれ何たれりたれ名たれをたれ八たれ湯たれ坂
 橋たれのたれ又たれ之たれ也たれをたれ名たれ作たれのたれ田たれ名たれまたれくたれれたれ其たれとたれよ
 こたれ橋たれとたれとたれありたれ
 くれたれれたれよ 一たれとたれよ 宇たれ云たれ布たれ十たれ坂たれありたれ
 是たれとたれ名たれのたれ方たれ右たれ高たれ川たれありたれ

~~~~~

尾崎の

○ 松山

大漢堂 麵教名あり

先公高木大漢のむすぢ屋あり中大漢の  
郷八永井右をむすぢの地ありは多分  
分定を修く村屋の地あり

今村 多分あり 前の所町とわかれ

本迎寺村 入口を町名は八橋といふ

あり石碑あり八町あり八橋といふ  
所十の御守あり五中御業平胡長

自作祝言あり八橋の橋杭縁紙あり

名目十之末守保あり屋は小池ニツ有  
社名と橋あり

あり世とあり七と八橋社名といふ

年竹もあり是今川ゆたの町才有在の

語念海あり屋は系守よりこれ

ありあり是八橋入海あり橋も大キ

あり一が今八橋といふ細川南あり

小一橋あり昔八橋といふ川矢結の細川

八橋のむすぢといふ之に河之太橋あり

今八橋といふ角本八橋といふ池難新

あり小川也屋のむすぢ業平の塔あり

八橋山無量寺十境

遇毒川 蜘蛛手 業平池 杜若

落田中 一松 在原寺 石塔

橋雲寺 下馬 駄野 森神社

折田口花曝  
花園里春興

鷹師山遠望  
村雲山朝霞

下馬の事承るるうりたりてかれ飯つひ  
 不也下るの親者八世平の妹作を由  
 業平のかけ衣まろをれおろ方より  
 中比級と近き再興也 元和  
 羅山先生以前の紀子三河八幡八幡の  
 后和のうこと在中約のうまをわかれ  
 今も傍々池難新へまろ乃をふの方一里  
 計まれば多の若の八幡をそ下の人遠  
 指とすの教へはく名を田とやうん  
 は名か一に字の多ま予が作りは諸  
 日人遺跡鐵鑪歩只有三河杜若名



とある又の曆二年丙申向陽林子の記ハ  
 牛田村とつて河洛傍右水の田中ニ八橋  
 の田ありと云ふ杜若と云く橋を信  
 と云ふはそこのことなり今の杜若業平  
 竹路近代植也向陽子の記也  
 里民云昔此所八歳見落水而死其  
 父不知之隣里人來告父大驚悲而  
 恨無橋遭此禍以掛橋故曰八橋非  
 有八箇橋之謂也其告來人之里號  
 人告郷今猶在焉與業平所記者異  
 矣俗說雖難信暫記郷談以備異說  
 云々

牛田村の八橋村の事

牛田村 此處に八橋なる事なるの如  
 きなり 池原野 四月十日  
 六月十日まで三日あり

池原野歌 鳴海ニ里守十三町

神名帳ニ河玉瑠名海神を神住候  
 名所も知るとり町に伝はる神の計  
 の事もたゞし池ありは池は野原  
 故に名をす四月三日多れ有依之市と  
 四月中より室月ありし室月ニ執り  
 是を名にたがひ野原に水神和泉  
 寺を祀りもいふ所の町

河原の町末たあり



わいつま川 かの十橋也

舟を渡らば方二里十二町あり信長  
舟の内より水野氏代へ宿を置ん水野  
より松平より後出陣より代りあり及ぶ  
八町町太の方へ橋投の神の社あり

二二山村 ○ 舟屋あり

舟屋村 舟屋あり 尾川と云 麩屋に石  
地ありし中 舟屋と云 舟屋と云

堀川 舟屋の堀橋あり尾列の方へ下  
舟屋と云 舟屋の方舟屋と云 舟屋

舟屋と云

橋狭間 舟屋に云 舟屋と云 舟屋と云  
舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云 舟屋と云

わり名寄子(經) 經

程をく衣りささへありゆえん  
二村とと題くさのり

衣の里とゆきしをさるる

穴生村 ねぢ屋敷やちよはせりん人の中

たてて現の付し時方の日海さ人少

穴生坂村 ○ 五五あり

いふ二月約日あり新第

落合村 西落合

有る津 系屋 本俣の風呂釜

衣と澤へ登

○ おころりまあり

乃の右より距離大の津の仕あり津

とと鳴海入口あり

鳴海歌 熱田一里才十二町

神右様 虎張玉を智都成海神社

和居妙子も海和訓を五五あり

昔八海をととく性来し鳴海深と

流し潮海りる所八たのさし川ととと

とと也と

鳴海海堤に浦さかぬん  
とと也と

正三伝書

風吹たしとに鳴海乃りしあり

たのさ流るる海との家おしと

かり和とすし屋の流と小舟流とも

いふの堤屋しと響入焼くとも

番おたり

星宿 庚子星 松山星 皆山迎之  
古多ぬし星宿 漢

町中より中流橋より小橋なり

田島橋 ありて 大天竺の宮あり

○ 笠寺入口也

笠寺村

轉輪山龍福寺 笠寺観音と云ふ

笠寺と云ふ所を石とす 新羅子七

笠寺と云ふ二十三歩あり 南無あり 塔

子池の中より竹生 湯より 勸修の奇也

刀形村 今川の河川に新たあり 古くも

たは海より

山崎 橋あり 大湯温泉あり

古く名を古屋の城と云ふ 六十町余あり 城ハ

清須とありて 織田信雄が居たり 後福

清は古く云ふ則ち居たり 古くも 寺あり

古くも 寺あり 今も 寺あり

古くも 寺あり 今も 寺あり

古くも 寺あり 今も 寺あり

古くも 寺あり 今も 寺あり

古くも 寺あり 今も 寺あり

古くも 寺あり 今も 寺あり

宮城 熱田也 赤石より七里 後海

八口町より あり

大黒社 寛政町橋 十二月 大黒也

大己貴尊也仙家日摩訶歌羅と  
 我浄之天竺(流)彼之風土と書  
 南海寄帰傳西方依公守食厨柱  
 側式大庫(初)縁と安重と金葉  
 と把り小牀(佛)踏て一膝(地)坐す毎  
 日(中)と扱て星(天)と大天(部)局(性)三  
 室(也)と一(大)衣(と)獲(も)他(食)時(も)聖(く)く  
 所有(の)飲食(と)考(め)番(火)と(前)列(て)  
 礼(観)と(ん)則(求)る(情)と(秘)く(効)験(わ  
 べ)と(先)子(落)て(世)依(天)竺(人)と(云)流(す)る  
 事(也)と(た)り(ふ)び(と)大(星)と(て)父(子)神(之)  
 高(文)傳(居)跡(尾)張(玉)也(智)部(今)雷  
 形(あり)といふ(事)也

白毫尊 三途川(依)本(傳)あり  
 名(古)倉(別)乃(と)又(十)田(一)里(塚)乃(名)  
 執(因)大(的)神(社)太(の)方(又)名(居)河(河)  
 社(日)也(武)尊(又)八(劍)の(天)と(は)ち(と)を  
 名(身)素(尊)也(鳴)尊(と)名(と)り(素)  
 尊(之)傳(る)也(云)云(と)大(蛇)の(尾)より  
 出(る)也(劍)と(天)神(く)も(り)流(ひ)三(種)の(神)  
 也(と)り(り)の(崇)神(天)皇(の)時(文)と(書)流  
 以(終)は(信)誓(の)玉(納)り(日)也(武)尊(の)東  
 夷(征)伐(の)所(齊)文(傳)非(令)中(の)也(て)  
 智(の)日(が)或(は)流(ひ)け(り)の(云)と(加)え  
 流(す)る(富)女(の)を(聖)と(て)滅(流)體(火)  
 と(殺)す(所)也(劍)自(ぬ)く(切)拂(す)也(后)



山はたありとて今無の形又山と稱す  
此と自ら向て柱とむしく柱てをさす本  
山より揚貴地のみ七方より近奉  
此遠美の時砂り也 以社司本秋  
氏八者京性まで古の船長昌一常徳  
多く津美物しは娘は嫁して船相  
とさるる 鎌倉の時八船長昌一入り  
夏美あり

七里濱 入海して本多川落合大  
崎の時八船中五京也右古金の地と  
わまえたは浦より之右に流くは船  
波浪天は接し尾流浮舟の境は海  
中より一常徳の流と遊りく常徳を

里風の音をありては海田越とて紫  
是ハハ一引おけて本多川とて其秋の中  
とて一漕舟長流の流から常徳一舟  
也又里風の時八津屋久知也一

左を也り

感徳の  
長石とて 実方二里

一万場 長石とて本里 平後方

長石とて万場十代りよ人の次中

冠 万場八二里本九町

飯屋 冠八二里本九町

是今年及三里 二人水三三人

水三の舟あり

河上へ三里程上れ津流の牛乳大

皇也 佐倉今左の系と姫崎とを  
るの系あり 東の方ハ 磯原の  
海也 磯原石塔あり 織田三七信孝の  
自教ももはしる也  
由井松重より 船申利が不也

栗名駅 四日前、三里八町

俣野路又十町一里と云 海内、二十  
六町と一里と云

向は大嶋中嶋見ゆ。 船場立す

町は船目付の火あり

磯原の方也 道は橋あり 性古い

引小島 船長の時 磯原左の  
一里 船長の時 文禄年中 始築  
城一柳古を 更直 豊氏 家内 結西  
倉長 長六 年む 中 野 古 備 古 備  
賜ひ 高 城 之 乃 久

左の海を 窪地 あり  
春日社 系 傳 今 三 笠 山 船 場 あり  
時の 行 定 といふ 神 石 傳 佐 藤 氏  
栗 名 社 傳 今 三 笠 山 船 場 あり

い 不 敷 船 の 名 といふ 目 合 の 目  
の 解 といふ 今 母 の 屋 合 といふ  
不 目 合 といふ 其 他 の 目 合 といふ  
事 といふ 事





日本紀云武王曰長河名曰洛水

天照大神とあり又天智天皇八年具の

賢王也河野天武と能く云ふは

よめて世を道と名づくは

崩河の流紀と記す大友皇子を殺

し即位し後天智天皇と云ふ

流中と云ふは流紀と云ふ事也

天武の天皇統は孝謙天皇と云ふ

光仁帝は天智の天皇と云ふ

なり流紀と云ふ事也

松寺村 生いた村

西家田 草屋あり

冨田 草屋あり 小村

茨橋村

長瀬川 古流

波豆の八つこ 八橋あり

波豆村 けうと石あり

ささの橋 小橋 けうと草屋あり

ニツ屋 ○ さいが川 七ツ屋

河川 さいが川 古橋 草屋あり

瓦町 田市入口也

登が淵 町とがれまあり

田市川 古橋 草屋あり 末古橋と云

城下より二里西 波豆 古流 古橋 古流 古橋

現ありけしの峯 雲首 橋より一町連下云

東家田

七二

おれ通次屋敷あり

四日市 石巻所、二里半九町

所領の地あり

町よりたのき舟場と干田あり

赤松海と干田、右側、近頃の村あり

濱田村 四日市より

去んぞう 赤松と日

赤松村 入口赤松、作の社あり

たのき濱田の地あり

おれり明 古松

日永村 町、田島橋

○ おれり明 松林の中、作の社あり

とまりり村 紀伊郡 とまりり川

通方 多きありたのき路、大津多房

四日市、赤松、二里半六町

赤松、白子、一里半

白子、上野、一里半

近頃の村、赤松、白子、二里半三町

上野、赤松、二里半

赤松、赤松、二里

赤松、赤松、二里

赤松、赤松、四里

赤松、赤松、一里

赤松、赤松、赤松、一里

小許、赤松、赤松、赤松、赤松

新庄帳 三重郡小浜町新庄町

小波 島井川板橋西十五町

因中村 桑田村 備后砂三重

取手町 秋葉坂 三重町

○ 松系三町

清水谷村 山内三重町

小谷 大谷 桑田町 山内下上坂

有林若帳浮橋島新庄大谷神社

△ 石葉陣跡 一丘野 正七町 旧八十五丁

お江右の音津結の跡

坂中右三葉所堂あり 高田山西福

寺と号をいふ石佛あり 一所の石

上人守屋四十二代文武天皇御宇

大法唐泰以不と号す 山中々光明

赫々たり 乃入てん世に山中々相谷

石より荒く侍十二林守儀也

是款為正堂 山内全別宝石と云

ありて 島系所の像 彫刻也 畫

仙あり 縁記あり

↑ 植野

○ 山内橋まき 二所迄

いかに新 入口よりいかに橋 小松橋

高田 山内三重川 大橋

たに石北門 是砂川 是松系川の流之

△ 松山歌 松山、二里、田、二里、亦三町

此の松山歌は、松山とて、小松山とて、其の古くは、

あまの鏡山と入つて、こゝより、松山とて、

波河系、此の松山とて、

俵谷抄、自辨歌、久松郷とて、此の古く、

○ 三町地、中野田入口、

中野田、西下の松山とて、

此の二二里の古くは、まゝの古くは、

和野田、八王寺の神社あり、

泉川、くろ橋七十尺、

泉村、十田村、小坊あり、

海老寺村、川合村、入口、川合橋、

俵谷抄、松山村、河併神社とあり、

此の松山、及、松山あり、松山、二里、白子、

二里半、

和野田村、お口、坂あり、

○ 松山、

松山、松山、松山、松山、松山、松山、

△ 松山歌 関、一里半

城、右の方、馬場、城、八雲、安藤、松山、

松山、松山、有故、蒲生氏郷、松山、

松山、松山、松山、松山、松山、松山、

又、松山、松山、松山、松山、松山、松山、

三年、同、十二年、松山、松山、松山、

松山、下、松山、松山、松山、松山、

東谷松山

三三

古口坂あり  
野村 龜山と續

○ 野村が口あり

のりさ 系た

野尻 緒古系金屋あり

野尻村 入口小坂

大谷寺 眼作みまわりの口あり

十八所の円左の金川と並木あり

古口坂あり

小野村 入口ニ小野権あり

○ 古口坂 古口坂あり

古口坂の系金屋あり

古口坂

園のり 古口坂 二里

ひくのり 古口坂 二里

穴窪のり 古口坂 二里

津のり 古口坂 一里半

津のり 古口坂 二里

古口坂 古口坂 二里

古口坂 古口坂 四里

古口坂 古口坂 一里半

園のり 古口坂 一里半六町

古口坂の系金屋あり

古口坂の系金屋あり

古口坂の系金屋あり

成の二実と云ふは此の塔と善法石破  
いふは帝於事方付は二実と同

ひりあり

地蔵堂 凡俗に在るは淨土作とい

つゝ實の地蔵とて名高し母與の時

は多神の体中より一箇の靈眼と稱

は此の一体は向て新迦の靈勸ハキ

世は有ぬ方のから淨土の目的に地蔵と

二三返唱をなすは使として去ぬ是

大に怒りて傍奇怪とて打くと云け

れども早に非をぬ又地蔵と誤して傍

と稱眼と忽地蔵の宗とて一に聖

の長の實は存留の信をよめて候

此の二は正智の信に即て我と誤せりと

不取あり一人一体の如くを連掛有

る子て連掛有るは是も均らまを

らぬとて懐くも入特異禪とて此

して彼もよ法一是と地蔵の體を掛

くと云ふは聖人の教の如くを身は宗

止ぬ今も地蔵の體は禪の切と纏る

一休は大徳守華嚴の才子也華嚴と

述は玉皇回は牛物考して一休と

多入牛の事と云ふは一休と

のち分ちてつゞきは例出し付た候

てゆり華嚴許可して我信を宗統に

て此信自ら宗と信せんとて一休不可

也一休、後小松院白くく我修を  
 せし後徳貞代後修を後修推て大徳  
 寺へ不入和泉の僧大和初より居たり  
 比前子火鏡と名を著し居り

かき置れ居り修考大初分し居り  
 同古子古城の跡あり

是方大坂好志の里をきし加を  
 と云麻伏児と云

里方加大 加太川方 二里

加太方拓植に 二里

拓植方作那俱に 二里

作那俱方上野に 一里

上野方鳴り系に 二里

鳴り系方大河系に 一里

大河系方望重に 一里

望重方加茂に 二里

加茂方赤良に 二里

赤良方くさかり越大坂に 七里

合は河内里

乃の右より右に居り

右の山に小橋あり市の瀬川に  
 門の流れあり

市野瀬村

作り及坂 右に筆捨山同松あり

河内系方 赤良村と云

○ 船日の上系方天の系 入口橋八里

おりの本村 多分 四万石あり

北一 味

北一 多分

水掛村 多分 野老 多分

倉ヶ地蔵村

坂わり 新入 口 小橋わり 是と 意ふ

東路 塩 古 橋 老 才 田 終

東路 塩 古 橋 老 才 田 終

坂 下 味 七 山 二 里 半

町 小 橋 二 町 町 方 坂 下 味

終 兼 川 下 なる なる 古 六 山 川 左 右

曲 り 川 中 下 あり なる なる なる なる

一 在 八 十 瀬 の 流 下 なる なる なる なる

八 十 瀬 川 なる なる なる なる

修 知 なる なる なる なる なる なる

元 坂 村 ○ 岩 屋 新 多 あり

古 六 山 川 終 新 会 あり 一 加 原 宣 此

法 水 子 流 なる なる なる なる なる なる

命 なる なる なる なる なる なる なる なる

東 路 巻 五



下へ引せられし川に流る海  
程系坂八河冷しと坂之

西行法師

程系坂の涼をよそふやうとて  
いふは分りけり釈尊あまうん

程系大の神は 上り口たまあり

神右様は程系郡の神社の心は程系の

社とて公家一傳承の社なりとて天武天

皇大友皇子とて玉と争ひ候勝を流

入りて附けしを有り流しは老翁と化

をて大皇と守り傳を授けしを流

社とて又桓武天皇の附けしは是傳て

心を懐けり附坂と回村丸は作て付りぬ

流るははめ休せし化て東妻の約はは

回村丸は力と命を賊年けたり一廿神とも

より室氏これにそひ諸人をよそより

おれとせり

こよしり 坂の心は回村丸流と候ひ

而とて古はは心候てしてさうくと稀

在候流流り居りてと心休ととり

候珠二帝が整しは心は強盛とありと

流る系屋 たの心は回村堂あり

まろしと候勝とそ心の傍あり

三ツ子山 孝三ツ子有白子名ねふ海と

とどむし心のそをさうんん考うととり

流村 系々 まろしが平 系々

高木の系屋 振系屋大 振二かあり

山中大の村 ころろり

山中千田村 幸合伝書あり

上山中村

大平村 下山中村 凍分是を道の中

○ 古道あり

下り坂 古路三日可通なり

猿の鼻 いなか なる

猿の鼻凍 とう下の坂あり

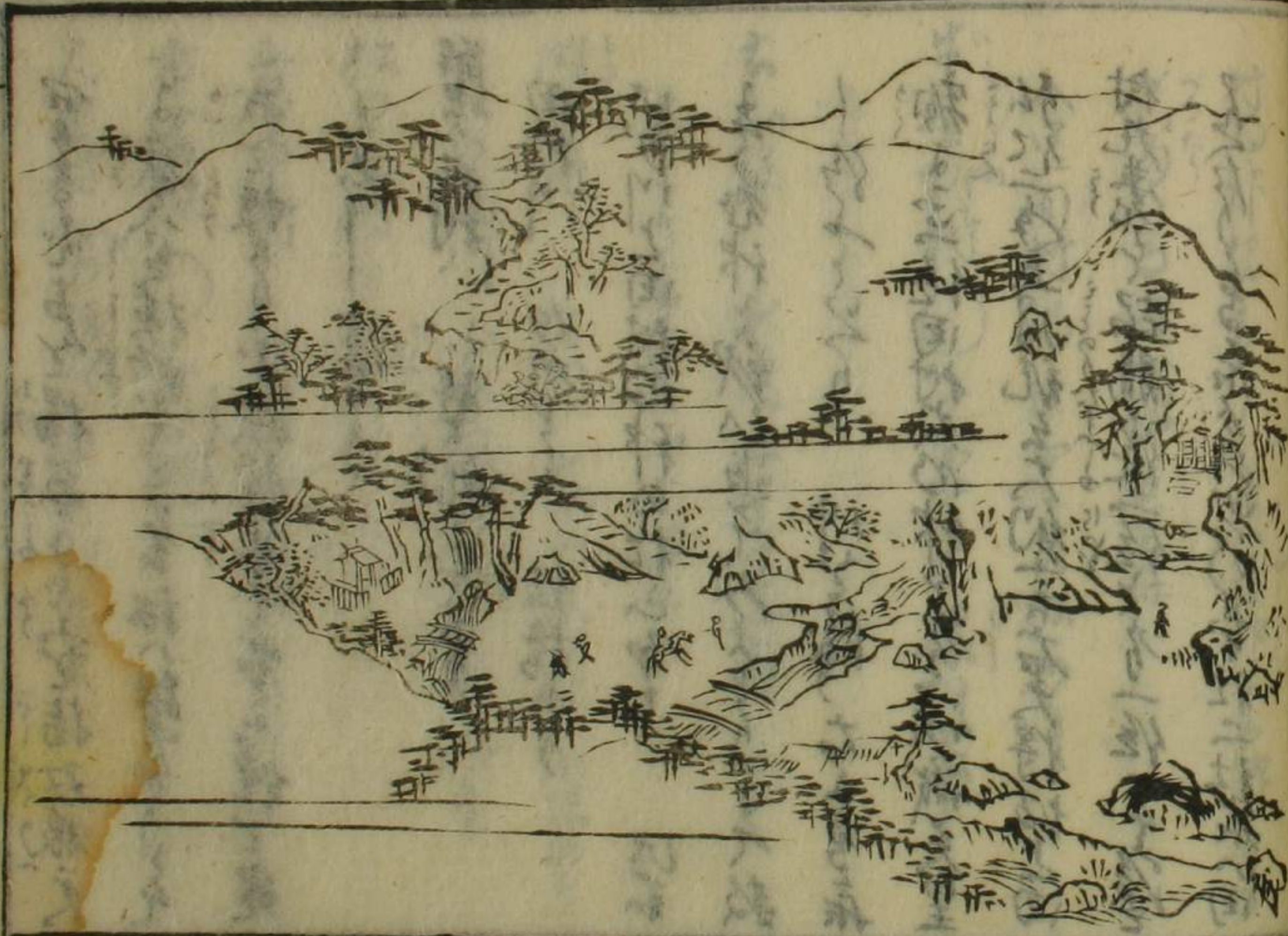
下り坂を解凍が坂と云坂の下たのり雪

二なる下は解凍が坂と云六輪あり雪

民のりる常いなり大解凍なりと武士教

せり解凍の雪亜妖心かして猿人を世なり

真心信於ありはひはる向くゆもの



百々をいふ声と揚あ子空と指双眼天  
子藤八は横河とと名極八解分りとい  
戒と授けしを姑怪止すをの塔を建  
くまろしとせり

解り坂村 解り館とて賣

田村川 白川と云 飯橋あり

いしか川と田村の神の松あり 此系

まき冠神と歎い進そみよとりまき教

し流せととり 川と後りちよ多居

朝ま五位田村大の神と分誤識天皇

弘仁二年五月記云大御言右大将坂上田

村丸薨と詔賜後二位と有一位を後

と云たり多居六町の中社二社在八田

村の神記云くくた公授神事作せり  
が為は多座の神官寺

入口ニ田村約はかこの松あり

坐室野村 ○ 多居者 根引あり

去心鼓 水只 二里才七町

是より多居は 十一里

付遠村 又月 家三三あり 小坂あり

松の尾川 分の白川と云 くり橋あり

松の尾村 類記あり

桑畑村 以月名室村あり

市場村 ○ 古口町

大井村 古傳と 注本村と云





泉原 梵字あり

田川村 二村 湯屋敷 伝承焼向

あつ川 小川也

三雲村 湯屋敷村

村の中 倉のしり川は弘法大師の打築

の松とて大木松二あり

表丸村 ○

備后新 甲斐郡 表丸の郷あり

くろ村 平松村 小治家村

くろ川 小川也 奈良の帝の討川と

言はく 乙卯 七子坊の天龍あり 乙卯天

子孫二流あり 乙卯天龍あり 乙卯天

乙卯天龍あり 乙卯天龍あり 乙卯天

乙卯天龍あり 乙卯天龍あり 乙卯天

乙卯天龍あり 乙卯天龍あり 乙卯天

乙卯天龍あり 乙卯天龍あり 乙卯天

乙卯天龍あり 乙卯天龍あり 乙卯天

乙卯天龍あり 乙卯天龍あり 乙卯天

乙卯天龍あり 乙卯天龍あり 乙卯天

石部

兼津 二里 昔八二里 十町

入口町 ○ 田町

みどり 湯屋敷 新乃松 中経

山越し 湯屋敷 湯屋敷

町 湯屋敷 湯屋敷

湯屋敷 湯屋敷

門下湖水の土とぬま土と作り求むる生む  
行賞と云ふ捨りかごとふと云ふなり  
其形富士と云ふ似たり昔は山とて巻す  
標は標松あり御田の標下は神村の標  
依て依有る者郷が射殺せし事大平  
元はわつ今も大さかむむと云ふなり  
又此山の子は山は流来りたり  
ふまは松村柳原と云ふなり

寺経物語

昔はさうと云ふ山は松むら  
八百六十代と云ふなり  
神谷信進は山野別那津と社名神  
大く津と云ふ同し神谷信進は  
甲斐郡石部鹿嶋神社ト云ふ

此良嶽ト云ふ

今之村 修徳落村 古修徳落村

城跡ト云ふなり

神村 言神田 新吾光寺なり

高野村 六世名あり是を標本

高野保村 梅本の山

○梅の本入口

梅の本 昔や 和申散わり実を伯傳家  
う合傷名方之を家ハせといは飯屋  
て音板ありホトトギス

小野村

子原村 子原村と云ふ昔は和の人

他定河内と毒の葉子と云ふ若原友人

二程全りり人の犯さん事と也れ  
元々至る母の後乃とま子と面を  
子一には其字を満月と子と一  
故は若く寺

右に笠松今八指く輪若社并を

左の方より河川あり後系橋

より河川あり河川あり河川あり

鉤村 長亨延徳の比作本多頼隆

より河川あり河川あり河川あり

小前あり ありまかり河小海門

川連村 河連村あり 橋下村

たの山橋やま川はりの池あり

お袋村

同川村 ○ 遠坂中村あり

長村 長高病中後洛とそと

長村 長高病中後洛とそと

大坂 大坂あり 伊原の橋あり

落井 小形倉新田あり

草津川 草津川あり 草津入口

草津駅 大津より三里半あり

入口札の辻たのより草津海及本宮

一河川あり素石の海と遊人ハあり

表山の辻より草津海と遊人ハあり

東各巻



かゝりあり 太の方より林の社を四化ハ  
野路の致と云

矢倉町 津の國へ 近方の森角に

焼が解と云 后物あり 近方より太

の方矢橋及之船場と云 里八所は

川と云 村と云 矢橋村は亦

湖と大津と云 津余取中の築

かた 橋本の城の橋山くの系志

傍の二重此敵心固あり 系

徳と云 白河と云 自然に

南よりと云 弘深河より

人ぬ 松和貞徳の息昌と云

一竹殿別

風吹草中ハいそ物れぬ

人活居ると云り 又右

武史の矢指の海と云

又矢指と云 乃方大

系津より 津よか

乙羽

さゆや矢指の系

武部明神の社 八建部と云 大

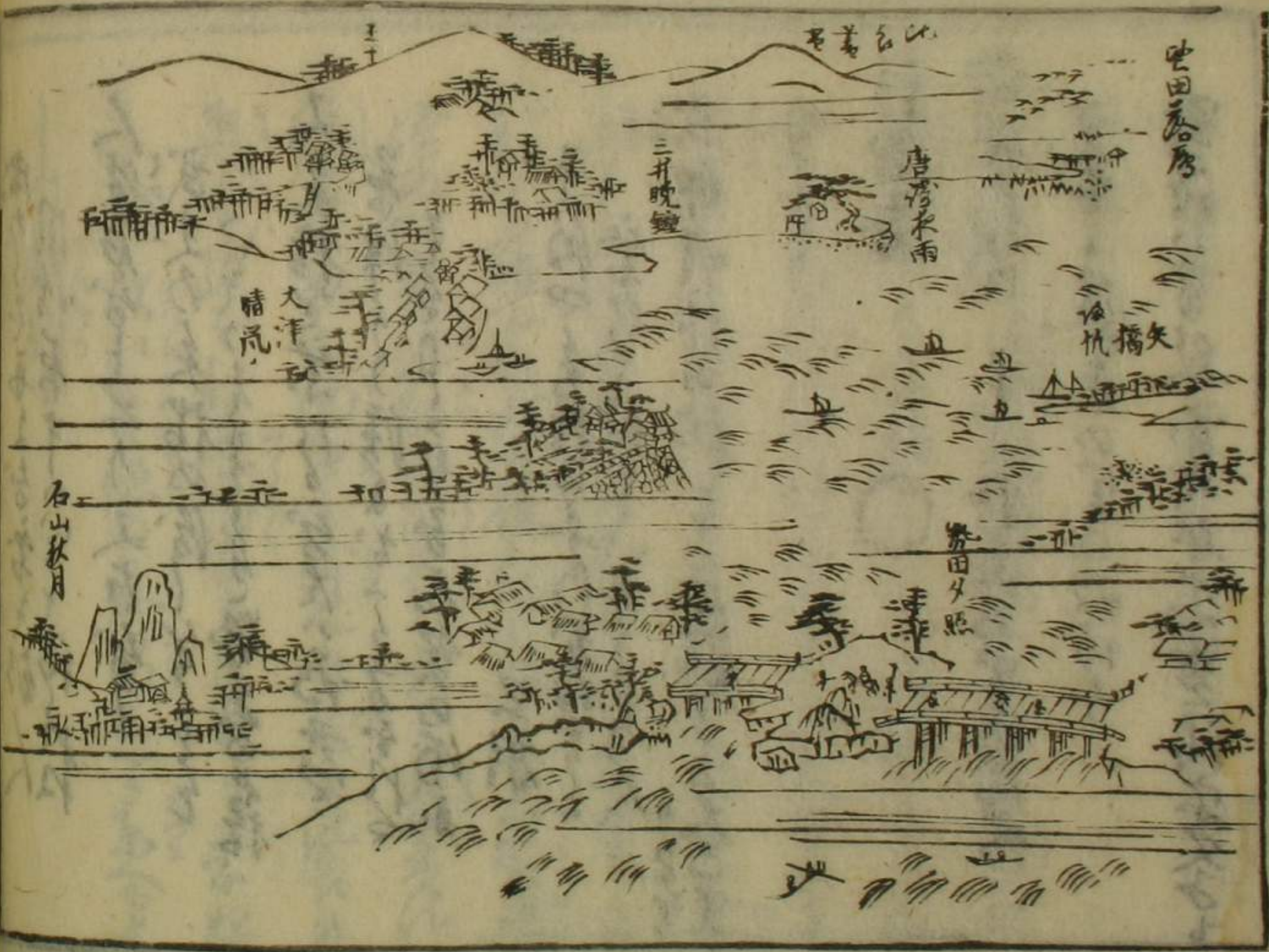
命あり

新屋敷

野路新田 是ノ野路の里の田

か系は 係系の里の

野路ハ首級家文平宗



此より新日ぬ 遠く舟中より船の上と  
 洛陽仁年仲輕徑入洛より此より宿を  
 兼久の乳小條兼時房時氏等後  
 念より此より舟中より京軍と河邊より  
 くる洛陽多く向ひて舟中より

十彈作川小川也 舟中より十彈作屋  
 發たの方也 右より世洛の玉水の流あり  
 一河より人世洛の玉川より舟中より

徳倉下向より 舟中より  
 打ちかき舟中より舟中より  
 舟中より舟中より舟中より  
 舟中より舟中より舟中より

大のめ舟屋 八のめ舟屋 大のめ川より

大のめ舟屋のかた舟中より舟中より舟中より

野洛新田 たのろし月の橋の辻あり

古は波の月橋たりと云

大がいの新田



かた本原 かたはま原ともあり

三原の家屋 此處より大津との往来あり

ねとまの川の入江と云

新設

此は洛やまの漢名より物とあり

此處の石橋のたもとあり

吹ひりてゆく此の風名あり

まはれゆく人あり

安土町 新設と云 勢多町あり

橋本 一橋あり かけしの神社あり

新田長橋 大橋長九十二間橋のこ

よりたよ石心ちよ津の橋と云

小橋 三十一間あり 勢多四代三橋田あり

先立ちて渡り人ありと云

子安方より一橋多の長橋

匡彦房

まきの橋も昔かありと云

いづれを新設と云

此地戰場と云 勢多神功皇后の

時彦神天皇の喪見忍熊王礼とあり

附武田宿禰色坂は追々戦忍熊王

殿を以て逃れ入りあり 壬申の乱

天武天皇大友皇子と云

孝徳天皇所造り相麻呂押橋礼と

あり 官舎と云

焼落を以て焼くまでと云

能取家より今井口并勢多平路と

兼久の乱に友軍山田清常を助けて  
陳之強如衆討つる是を討つ 建徳  
那和御者も長年以前に陳に討たれ  
お討り長年討つるを介軍場と  
事計りしとあり

多井川村 善々 近江新碓田郷あり  
いふこの郷は天下の名地を源平争奪  
とて飛ひくたれ又白く近江は捨原  
と云ふべき常の御あり捨原郷と云  
捨原より御とあり入大津へ後府  
假取く御御守へ今より今常の  
御とありとあり いふとありたる  
あり石山十二回也小橋より約十八町を

いふと菅谷とて日月と菅谷とあり  
とて菅谷とて日月と菅谷とあり  
二倍大なる光強く橋の小南よとい  
集り丸かたまり空之常と云水とあり  
落く散て流る是と石山の菅谷と云  
月事ハ字流く流れり 杉政長日此  
ハ字流橋の名と云く戦少少杉政の長  
ありとあり 石山の教習初尚建  
立也性お大寺の石山寺信正大佛は  
陰徳の料も黄金と求りんとては  
いたりとも是とも是の非 后身より良寺  
名とて後いれぬのるは先いれぬも  
たつあり二十二年に菅谷あり



○ 松原より 比叡の松原の落指くし  
冬うかの葉うりちくちく 函路ま  
くきりぬと

河路より多平がら流場わり

膳不 比叡より日在神膳と信う比叡

よりゆめへの粟飯あり 入口より

八幡文 城門の民作あり

城太の方よりあり文縁三年大津の城

子系格守わ言次居くをまを六年

大津と居くは比叡と居くは田島

西と居くは比叡より高城よりあり

新羅明神社 三井寺結寺也信教

羽子智徳大所入唐一海路の時海と

能風より居くは比叡よりあり

とこれの居くは比叡よりあり

と現し神をよき動の神八幡よりあり

が形楯と九流ひ居善あり

比叡の神あり田島よりあり

しうと大所居考ひ人市之并居の結

守とす海路を比叡と居くは二男

光の神をよき元服一動の神と居

りる奥列の神をよき元服一動の神

功より甲列は封をよき甲斐源氏の

氏神あり 町より三井の水橋よりあり

町と中の方よりありたの方社ハついで

は西家の殿よりあり田畑は元の社あり

まはしは月山王系の日置家の版と仰るは  
いふ八幡牛次大王新王の社より身起  
よは少く少く西の名とす

八丈新王の社にかゝられたるはと雲津  
の系をいふ事と仰るは少く名あり

若狭目録系天智天皇天武の天智天皇の  
次とす事と仰るは少く作は天友白子

天智天皇の子とす天智天皇の作  
玉政と仰るは少く群長等とす天友白子

よ高と天武天皇は傍く不安世と道  
て傍と仰るは少く魏十右衛門入天智崩沖

とす天智天皇は傍く不安世と道  
尾張の系と仰るは少く流其初と仰るは天友

白子等と仰るは少く魏十右衛門入天智崩沖

よ高と天武天皇は傍く不安世と道  
て傍と仰るは少く魏十右衛門入天智崩沖

とす天智天皇は傍く不安世と道  
尾張の系と仰るは少く流其初と仰るは天友

青場村 橋本より一渡り

とす天智天皇は傍く不安世と道  
尾張の系と仰るは少く流其初と仰るは天友

わりの若くは橋本村にありて道は石塔に  
佛道所相言ふ事あり

片田の浦 唐橋一松 坂本正王八王子  
赤坂正王八王子

湖水八長十八里余琵琶の形に似たり

現地遊と云如雲嶽の終項よりこれ  
いそ形を似て、所餘の海を長根の方之

佐宗が

余故のゆかりなりまをるを故り

ふしうすくく浦凡ややく

志賀の浦を歩むといくそかり渡の

老のよをよるをもありけ

後を存院御製

新あつらふの海をこらゆをし

わひよまきまゝ志賀の海

松本村 多量なかり遊家終極

打者の濱ハ松本村の片町の茶畑水涯

あり八十の深と、水玉舟矢槍の舟を

町より筋右の濱乃矢槍の舟は紫たハ

系町筋ハ 横町宮のよりり

大津入

大津歌 三条島九一里塚を  
三里才云 三里才

和門の跡今五十三

西云門関より白里川一七五十三

其経程三子八百六十五里也古物の里法

子算をれを四百八拾里余西云二里のり

甚遠

大津ハ皇の天皇定居一終い高元後

の文と云後天皇智天皇白皇統と此皇

一餘浪浪松松もすは本湖水家

水海車海高船の津濱わく今も高浪

の隣里に、源が要伏浪おのハ唐津

和余堅固敵ハ三井の眺を登り村之

かすり波は不文友皇子女家とて

東谷



始て六言の詩を化し、大武天皇の御子  
大津皇子の御子生れ給ひぬ。大津  
宮つく由中初て七言の詩を化し、大津  
宮文物権興の地なり

札の辻 右の河に三井寺と長等山  
園城寺と云居り、ゆゑなり。山あり  
天台宗の御子、四箇本寺の内也。佛教の  
進化の後、慈恩の御子と智龍の御子  
と争論あり。智龍の御子二百坊、  
まゝといふ。後、まゝに教  
山といふ和あり

二王門 運交甚茂と伝  
令當 運交甚茂と伝

大津堂 十三年四月に造る。大津御  
用山 教侍和尙百六十年の御子なり  
生みの佛を教侍とて、智龍の御子  
なり。又大友皇子教侍の御子  
なり。ゆゑなり。後、まゝの御子なり  
まゝの御子なり。ゆゑなり。不  
開御井 三の水は天智持統天皇の御  
所産湯。用ひし三井寺と云。三井  
寺は古法眼元信等也。彫相は花澤門西  
と云。御井と云なり

經堂 八角花澤門西の御子  
傳書系 石塔は天智天皇の御子  
村西玄樹 經山寺焼ると云。玄樹

加持くわじ一いっ巻まき之の 昭あきらる入い院いん之の 鐘かねハハ依よ辰ちん之の 勸くわん学がく院いん 怪かいがが求もとまるこ  
けりけり寺てらあり

鐘かねハハ依よ辰ちん之の 鐘かねハハ依よ辰ちん之の 進しんりり文ぶん保ぼ二に年ねん又また三さん井せい寺てら堂どう上じやうのの時とき

いい鐘かねとと山さん門もんハハいいれれのの 寺てらノノ家けノノ 寺てらノノ家けノノ 寺てらノノ家けノノ

招まねききままとと和わのの内うちハハままのの 招まねききままとと和わのの内うちハハままのの

中なかつのののの 中なかつのののの 中なかつのののの 中なかつのののの

浄じやう名な水みづハハ新あたらししのの 浄じやう名な水みづハハ新あたらししのの

徳とく野の権けん現げん 徳とく野の権けん現げん 徳とく野の権けん現げん

傾かたむけけ石いし 傾かたむけけ石いし 傾かたむけけ石いし

是こゝにに有あるる 是こゝにに有あるる 是こゝにに有あるる

通とほりりのの 通とほりりのの 通とほりりのの

三さん井せい晚おん鐘かね 三さん井せい晚おん鐘かね 三さん井せい晚おん鐘かね

堅かた田でん落らく雁げん 堅かた田でん落らく雁げん 堅かた田でん落らく雁げん

いねりきこあふそてしらすまらとさ  
世因ふあひきさるをさしうなり

唐倚夜雨

秋のわりよきとあつりく夕風や  
とあふさるさうり幸津のま

粟津晴嵐

空より霞のけしははれくも垂  
ふあひし波の向津をさう

澁田夕照

露の白しふふとゆくもはる  
夕口のうらみせこの長橋

矢橋帰帆

去帆行くをさるまふ舟の心  
うらむの候り波の長きせ

石山秋月

石のまらむの海は月うけを  
うらむは波をさるあふなり

比良暮雪

雪のふりしはるけの夕雪を  
能くさうりまはるる

唐津の一松の葉一本突わり十両万の

るよさうの針も何りともふ初ま大

松一本ふちりかた方の松の松の松

比良浦の浮舟雲はあふ心傍の舟

佛あり一独結まても有るわ

りかたふかたのうらみわりの

比良松之嶽

嵐ありむくのち松の松の松に  
あふまはるる針をさる

塩津

まはれむかひかたのち松の松の松  
あふまはるる針をさる

海津

うらむのち松の松の松の松  
あふまはるる針をさる

竹生橋のまらむのち松の松の松  
あふまはるる針をさる

生かたり水精湯之の基桑津の舟也  
天と安知と

同はたかく流るるえんそんは流  
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

志有久 天智天皇御宇大津の御之

き成やまの御河原ふとと  
いりいりいりいりいりいりいり

小松 白飯 小松大海 今津

仲の湯 長向寺 志那 山向 矢指を

石所 観音 藤巻 長らくらむふ

小宮 観音 長らくらむふ 山狩 観音

とくおるるなり

八所 大津 入口 古也 観音

八所 大津 入口 古也 観音 あり玉座をく照すの飛車もまたあり

相坂 太の山と名坂のふもとに雲の峰を

蟬丸 ありと云 佐々木 寺八の裏小

園をよ常念仏寺と小町が佐々木

の池をよわり 名坂のふもとに道後神社

あり 蟬丸 ありと云 佐々木 寺八の裏小

佐々木 寺八の裏小 佐々木 寺八の裏小

官邸 ありと云

あま寺 石碑をよむ 佐々木の裏小

若森 林 天皇の御兄 孝徳王 紀と名

一 時 武内 宿禰 連 御て 佐々木の裏小

とく 名坂 と云 桓武 天皇 宇治 城 あり

とく 名坂 と云 桓武 天皇 宇治 城 あり

蟬丸の事 延喜 二十 歳の 所 時 あり

集と撰と云ふは、蟬丸の言はれぬは、内史  
田の文分、傍りあり、なまこ、なまこ、なまこ、  
細と澄と、その物、澄と、蟬丸、  
の難文ありと、是、又、  
空谷、  
と、曰、  
らす、  
老翁、  
知、  
て、  
寺、  
一、  
あ、

塔の東、  
昔の園、  
や、  
も、  
向、  
ハ、  
中、  
向、  
大谷、  
ハ、  
○、

火打ぐん分 右ニ大洋さうつり場と

長河

返分 系代尼命乃未ニ蘇祓之

標本 右の方小園越細屋なり

六地藏堂 洛所東一 是方山科の山

十禪所村 山科七郷を名置坂と云ふ

山科いふふ 十禪所 右の郷を聖

徳太子の作 田の又川 小川又是方

七小園越なり

田の又村 山科は二三田の言あり

いふ又田右下の名あり

彌生大内神 右の方 都の北河津光院

才子小川家志筆也此社ハ天田屋命天

太玉命也二神高皇産靈命の部

依々天孫降降の付方右の羽田

と成のやうに寛平十一年名をいふ

文と云道もや田の又河系と云出旅

不神を説くと此傳説なり

ゆゑたつ田の又河の事なり

此社の門は立字の社と云今昔物語本

田に云源朝経の長は延和河子多紀の

友の親王と申す人の子と云いけり

かきと申すは管領の長と云ふは此傳説

と云い微妙は彈正を付命坂の言ふ

云前河内名と申す彈正と云ふは朝実

と申す或は此の文の難文と云ふ人



山科よりある谷を縁て六条の橋を分  
けたり若松谷小松谷とあり小松谷首  
平重盛の傳せり小松谷の伝あり  
滑谷は法興寺とあり伝せりあり也  
今世六条を人の名也

所高野村 日の名久十二町十七石

所高野 池上落は八条町人の山を  
向ひおれと上の山は天智天皇の池  
廣よりある名居りとの山高野を  
桂へて天皇は御まわれ遊ばるの御と  
かきおれは山あり天皇は御山高野  
んよりいりやまを御まわれと山高  
と云く高野の傳へて高野は法興寺あり

穢服のちのハ山常七界は山の上之榮  
しと也 東山大佛殿建りけり所傳の  
ある山科よりある門地を築て石橋と  
あり、橋のより文字河を天漫徹  
てあると云くあると云く家尉と云く  
人の名也此谷を乳と云くおれは洞  
鉄の懸て造りやうかいた朽てある  
ころす上と云いあると云く名掛  
ありと云くの中より家尉の字ありあり  
と朽て忽消ぬは事怪寓先生あり伝  
ひたりとの事也天智天皇の靈  
柩してありと云あり

近代法隆寺の巻を伝へたり所也



石柳を塚かきしる是ハ小野毛人の  
墓とあり改葬ありて世をのち  
毛人墓と云ふなり

右の小洛ハ栗田口といふと云ふところあり  
路あり

○ 坂下

日の暮 暮々 坂の中より第一を望  
古町古宮あり 坂長しなる家此

後子千早松とて幹一本に枝多く分  
焼がやと云ふは又新羅場なり

是日の最清也 是日名トリ坂少  
流揚多危 是日栗田口の内也

流りけの水 入口は源九郎新羅場

外ハ市街栗田口市ハ新羅場

ハいふと流掛市市ト打合一也

是と山科也

栗田口 有栗田の宮白河流所也

是日名トリ坂也 園向ハ道急と

上の山と栗田山と云

古今集

あまら

うきめとてくららとてのみそのうら

いふハ水尾の帯の流るる栗田口

是流りけの附しとてのりてとて入

よりりあまらと云

あまらとてくしは栗田口

たは神代社也ハ皇孫降臨の時也

の天孫也 天兒屋命 大玉命 様女  
命 鈿女命 玉屋命 俗又天孫の文  
と云一説は山山子倭勢王人種品  
此の宗光と云志 律説と云志 内  
の文を勅信せし火の日のふと云  
山山の奥より約が嶽と云滝わり粟田  
山独秀方家の上より二并守めたる智信正  
の別墅あり今八南得守の陣門と云  
此智の靈白劫よ紫くつんりりゆふ  
約が滝と云今八南得守の陣門と云  
た智と云今八南得守の陣門と云  
わり是と別あり

右の側は信金楊枝とて河田玉紙紙の

里柳とて別り名物なり  
たは河津院が家より今玉の頂也  
此子平重盛遠之の娘山雲今は  
汲ふ山と云今八南得守の陣門と云  
たの方家の後上將軍家あり桓貞天  
皇平亦成の都と云たは河津院王城の良  
後甲冑と云今八南得守の陣門と云  
後めは山雲今八南得守の陣門と云  
動と云今八南得守の陣門と云  
たは河津院が家より今玉の頂也  
はらう九月十五日あり

右の言のたは河津院南得守永親  
堂下河津院康ヶ谷と云今八南得守の陣門と云

右の町屋の邊に熊田院の坊あり、僧は貧  
困地と云ふに、是れ作られた今ハ乞食の  
住家と云はり

左邊に青蓮院門跡 千三百石、堂門々

僧敷大所作の三申の社并元三大作堂

白川石橋 桑ヶ谷の白川より落る小

川あり

信の誘ふ系ハ九万八千軒、白川と合ふ

外千石八千石あり、古ハ八百石、二万石

あり、小系桃橋と云ふ、村ハ六波羅、系

川の流目、住と云ふ、是ハ其ノ屬軍

住居あり、室町家ハ、徳玉の武士系

勤王、孫頼朝、男ありと云はり

東の橋、信南ハ、乃ハ、智恵院也、紙南

水と云ふ、同町家の後、白川の中

梅宮結り

三條橋、お家の流、中、石川、中、世、この小川

あり、右ハ、信、律、系、下、智、恵、院、橋、中、之

た、ハ、信、系、六、系、の、橋、紙、南、を、信、水、大、佛、之

と、ゆ、ふ、也、ハ、石、橋、と、ゆ、ふ、也、 東の橋、信

法師、ハ、武、中、和、尚、系、を、云、ふ、と、云、ふ、後、ハ

同、旗、の、拍、行、と、云、ふ、

同、不、指、家、寺、ハ、聖、宗、園、白、雲、派、の、石

塔、并、伯、母、三、十、二、人、の、石、塔、あり、俗、ハ、高、野

塚、と、云、ふ、 聖、宗、寺、寺、町、の、角、也

○ 之、系、通、馬、丸、人、家、の、裏、と、云、ふ、



いふ深き少くも修とそあつて極の  
九十九なりり少くも今より

以村と申すは碓氷郡の  
勅修寺 弟屋控あり

之より 勅修寺の跡  
筑山弘法大師の作と云傳ふ

勅修寺山は古方也  
小大岩あり

平の弟屋  
狼谷 山は狼谷一上六  
人切橋 強盗多し人切

谷口 弟屋 是と狼谷  
○ 弟屋が跡取と

筆の跡 八先古多あり  
深草室大工所 左邊  
形次市石塔と云ふ八寺市

二系河内 是室山  
夜衣 松樹は名

一品舎人親王社 以親王  
と撰しはは外政事功多

限天平宝字三年退号あり  
盡教天皇と云ふ百年後

の所は早良親王  
て後王羅あり 澄路

食との基なり 是後

東路表

修へ舎人親玉の相殿あいにほは多しなり  
たけのたて大和屋之社の西右八町續きて  
稲荷大仏いなりは又糸の橋いとがかり

聖澤村 澤原の門之法衣宗寺の門

聖澤橋と云わりの聖澤寺と云ふ

同町は聖澤井わり傳正つとむら面照おもてのふ

らり井水まうりいづみと云ふ 今澤いま寺てらと云

ふ香かぐ矣 伏見の門之神功皇后じんこうこうごうと云ふ

社門しんもんは金札きんさつの多しなり

伏見種屋町 連雀町 西町

○糸橋 是も船ふねは紫波門むらさなみと東井

わく大坂おおいさかより之方このあたまで八伏見やっしの門かどと云

ふり八渡川やっせがわと云水みづと云ふ八字やっせ渡川わたりがわとい

いふ一流いちりゅう中なかて下くだより上あがりてと云ふなり

何川なにがわと峰源みねのたもとは道みちは湖うみよりか城しろ西

と麓ふもとより流ながれ流ながれ大坂おおいさかと云と下くだり井

ととい大坂おおいさかより上あがり舟ふねと云いふは舟ふねと云

引火ひき引舟ひきふねより大坂おおいさかとの舟ふね中なか回まわり

伏見 渡わたりは六十町

糸橋いとより飛橋とび及橋あが橋はしと云

三橋 斤町 三杉屋

○ 渡の道わたりのみちは

小橋 七十町 渡の入口橋わたりのいりぐちは

と云ふ 右の糸橋いとより水車みづぐるまと云

淀

物部、一里半  
三里十二町

城 大の方 天保二年 宏徳三年 統七  
月廿七日 廢城 之後 廢大坂 跡 前 元和  
元年 有 菅 和 泉 寺 寺 虎 古 城 跡 之  
改 跡 之 同 九年 伏見 城 之 跡 築 之 保  
証 中 之 定 經 居 之 後 為 城 之 及 小  
大 信 田 二十 六 町  
大 信 田

小坂のこぼれ 寺 寺 跡 之 跡 之  
い 之 跡 之 跡 之 跡 之

信 田 跡 之 跡 之

信 田 跡 之 跡 之 跡 之

よわり 左 橋 之 跡 之

左 八 橋 十八 町

右 八 橋 十八 町

全 橋 跡 河 内 山 崎 之 跡 之 跡 之

橋 津 河 内 山 崎 之 跡 之 跡 之

と あり 之 玉 橋 之 跡 之

芝 之 跡 之 葛 葉 之 跡 之

葛 葉 之 跡 之 跡 之 跡 之

た 別 奉 之 跡 之 跡 之 跡 之

葛 葉 人 足 跡

梅 之 上

上 橋 下 橋 三 三 町

め くり 左 八 橋

辰清

全庵の第屋



禁野ありて一推亭ありて此の所  
物の時今又の之良の能子ありて  
此をと林野と出割れありて是  
天の川

牧方 大坂に六里

町の門は岳の傍あり  
右の山下は高柳の城と云ふ是永源  
の比より入江左近和田侯と云ふ  
高き右近長房等と云ふ此の城  
と云ふ元和九年内亂此侯と云ふ

備へるありて是

おひ



松が鼻 高屋 大ま

志の野



一妻村 作を村と云一妻村の十妻

社とありて

作を天神 大まあり

本安元寺大呂の四小野寺務二和

親王の所本寺高社の外およそ

後水尾院仙洞の所創名の中本と云

新たるとのなり

仙洞探所創製

家の風世と云ふと云ふ此の  
探所と云ふと云ふ此の



河列作古文六重神の廟也佐々代  
 社われはるる系道夫の儀式もかりし  
 と永井信列大守尚政相長再身つて  
 しいより壯業因と奪身ひてそのハ  
 高き膝とのハのどむとの比  
 大と天皇百和香と梅の折枝とと  
 と高政の長と終つとと神危と接  
 獨籠のくおと終に終え右の沖  
 刻家高政の長と終つとと細之川  
 珠の宝也ととぬらの葉とこれ加  
 さん神の徳いしくたぐおれがま  
 わる終えんは清刻家の中身と  
 つと終えりとと終えりとと終えり

然るをいさうととととととと

茶安元年大品念五

北野寺精二不親王良高筆

里人の云くはつ枝の梅時とぬ比卯月  
 の末つとまは接ありに終えその由  
 淡くそ神意いやくしく梅とと  
 わりつとつとつとつとつとつと  
 ちとつとつとつとつとつとつと  
 ととつと

いさつち 大まれ ○

守口 村のちを接河の境橋あり

人ははああは

塙の心 今市 ○









